藤井寺市発掘調査概報　第４号

はざみ山遺跡（HM2007－16区）

2011年３月

藤井寺市教育委員会

はざみ山遺跡（HM07 － 16 区）

位置と環境

調査区は、はざみ山遺跡の北西部端にあたり、北東側は西古室遺跡、西側は葛井寺遺跡に接するところである。西古室遺跡は主に平安時代の掘立柱建物が多く確認されている。葛井寺遺跡は 7 世紀中葉に建立された葛井寺跡周辺の遺跡で古代から近世にかけての複合遺跡である。古代には集落跡、生産遺跡、土壙群などが分布している。葛井寺の西側の仏供田池周辺では瓦窯が構築されており、それと関わる奈良時代の集落も見つかっている。また、瓦や土器を焼成するための粘土採掘孔も見つかっている。葛井寺跡下層で見つかる 7 世紀前半期の集落遺構はその東側に広がっており、造営氏族である白猪氏（後の葛井氏）の本貫地と考えられる。

はざみ山遺跡は東西 900 m南北 1300 mの遺跡で、範囲内の古墳を除くと、主に 7 世紀前半から続く集落跡で、場所によっては中世を中心とするところもある。

旧藤井寺公団、現在のさくら町は平成 11 年の大阪府教育委員会の試掘の結果、遺跡が発見され、はざみ山遺跡の一部として認知された。この範囲は北区画、中央区画、南区画に分けられ、中央区は公団として大阪府教育委員会（はざみ山 02 － 1 工区、05 － 1 区）［大阪府文化財センター 2005・2006］が、北区画（HM07 － 16 区）、南区画（HM07 － 1・9・15 区）を分譲住宅として藤井寺市

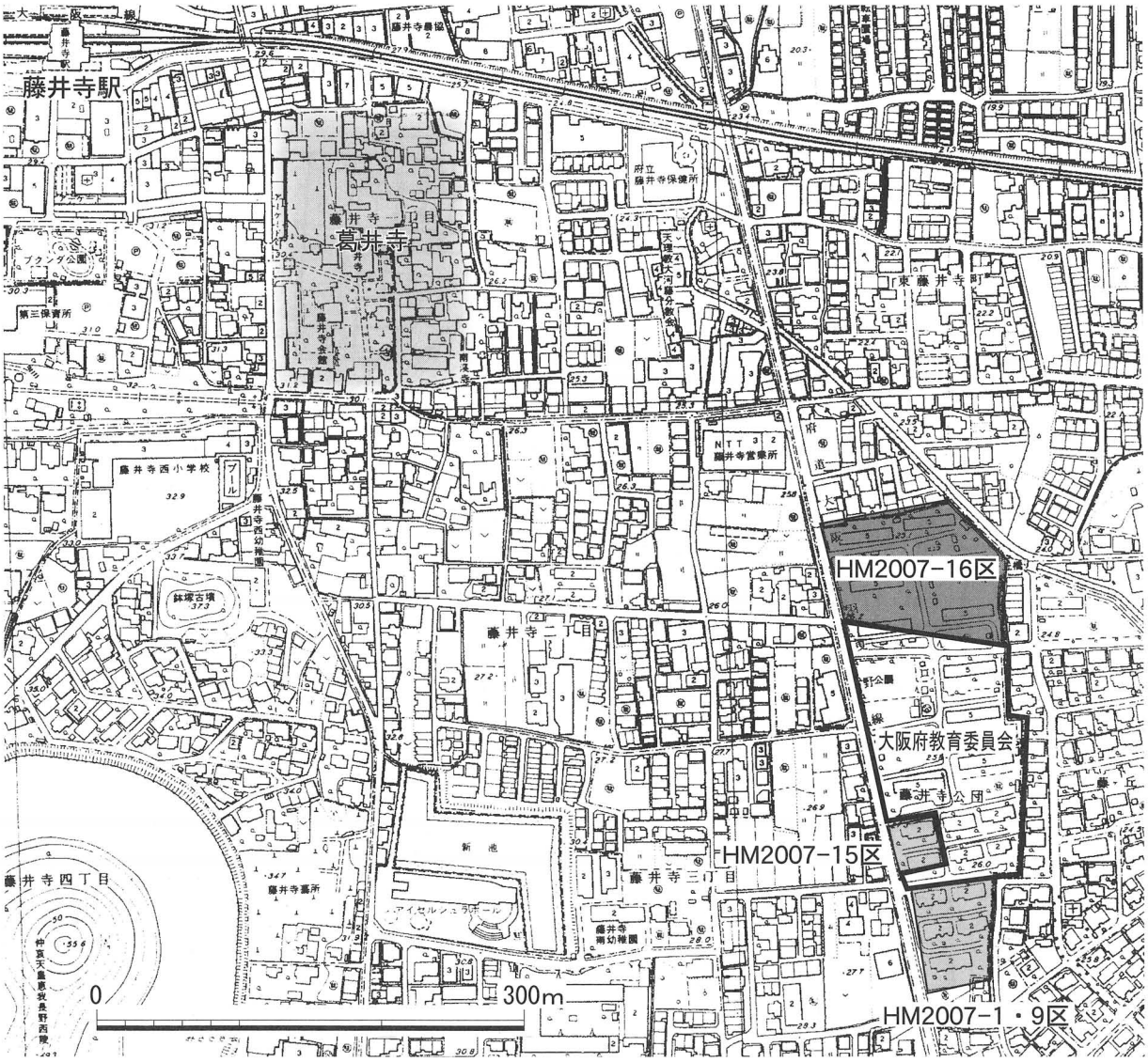


図 1　調査区位置図（S ＝ 1：5,000）

教育委員会が発掘調査を実施した。今回はその北区画の調査成果を報告する。

旧藤井寺公団地域ではほぼ全域で、7世紀代の掘立柱建物群が数多く発見されている。はざみ山02－1工区の北西部では奈良時代の建物跡が確認された。また、02－1工区北東から今回の調査区（HM07－16区）東側にかけては平安時代前期（9～10世紀）の集落跡が確認された。これは北東に広がる西古室遺跡南西部まで続く。さらにHM07－16区の北側及び、HM07－1・9区の南側では中世の集落跡が見つかっている。

調査の成果

調査区は、分譲住宅建設に伴い開発道路部1505㎡の発掘調査を実施した。トレンチの設定は東から南北方向のAトレンチ、東西方向のBトレンチ、西側の南北方向のCトレンチ、Bトレンチ北側をDトレンチとした。

Aトレンチでは南側で2条の溝に挟まれた平安時代の掘立柱建物を検出した。中央部及び北側では平安時代の掘立柱建物と井戸を検出した。Bトレンチ中央で大型の掘方をもった平安時代の掘立柱建物と溝を検出した。また、AトレンチからCトレンチにかけて、やや蛇行させながら東西方向の奈良時代の溝を検出した。Bトレンチ西側からCトレンチ南側では7世紀中頃を中心とした粘土採掘孔を検出した。Dトレンチでは東側で平安時代の掘立柱建物、西側で中世の落ち込み及び掘立柱建物を検出した。Dトレンチの遺構からは、中世遺物に混ざって、奈良時代の重郭紋軒平瓦が数点出土した。

今回は、Aトレンチ中央で見つかった平安時代初め（9世紀）の木組の井戸（SE01）及びそこから出土した遺物を中心に報告する。

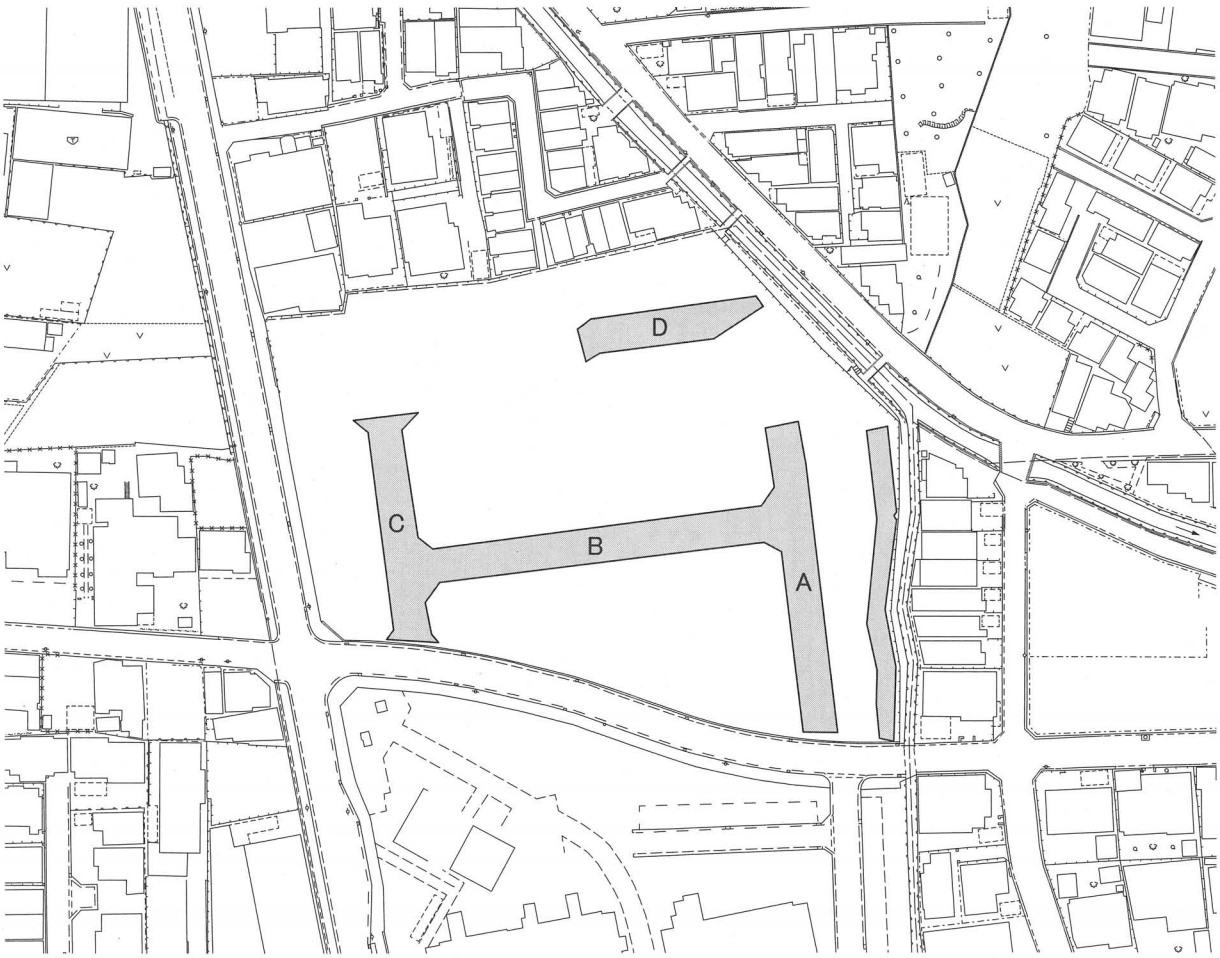
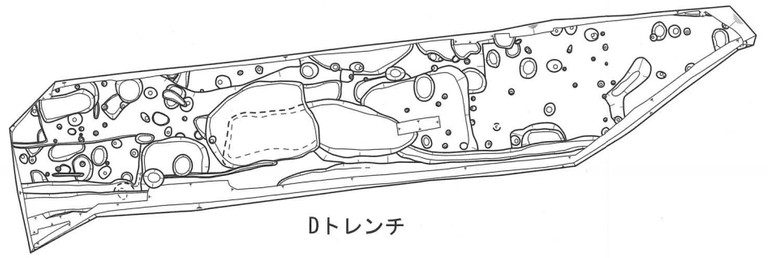


図2　トレンチ位置図（1：1500）


Dトレンチ

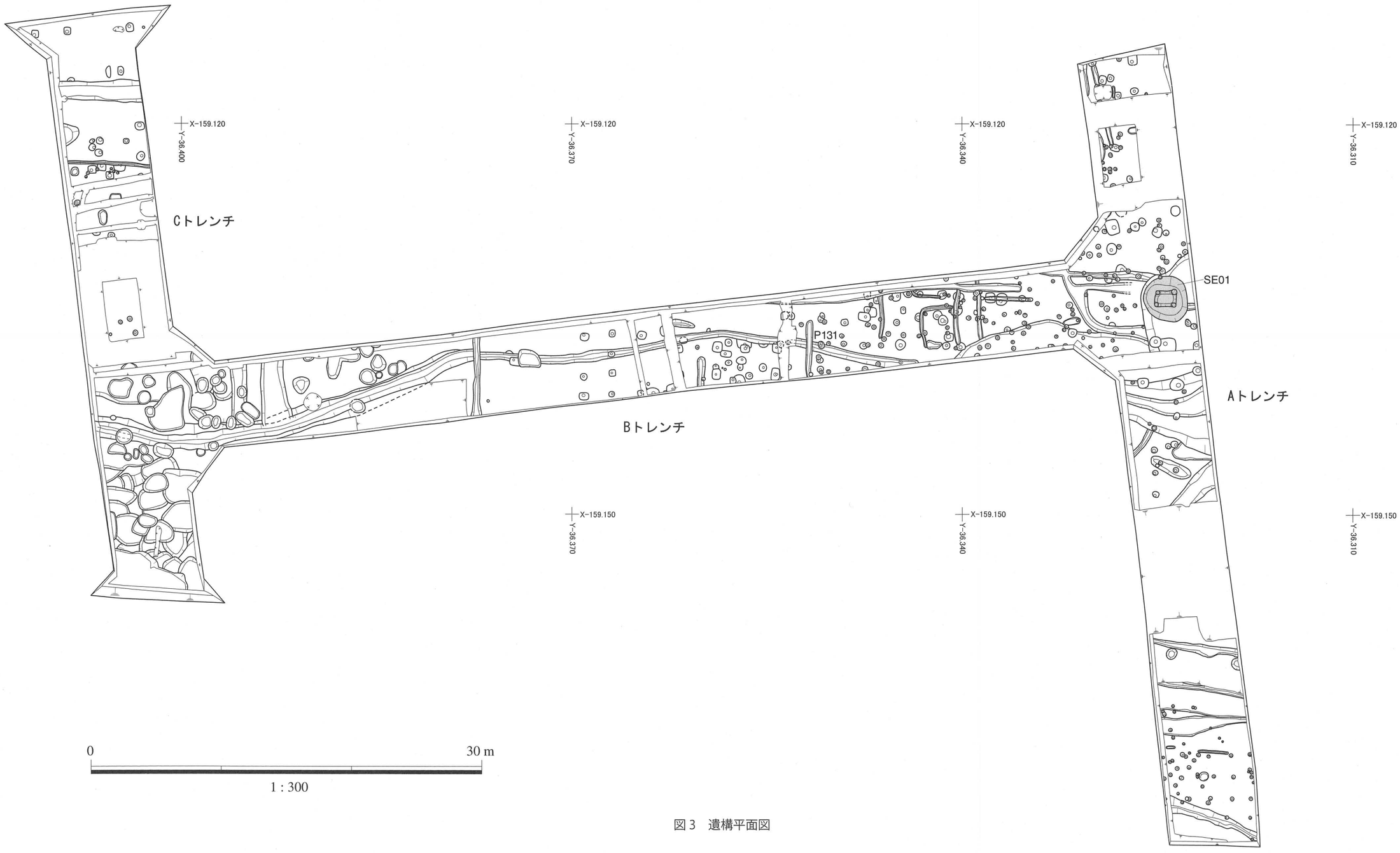

X-159.120
Y-36.400
X-159.120
Y-36.370
X-159.120
Y-36.340
X-159.120
Y-36.310
Cトレンチ
SE01
P131
Aトレンチ
Bトレンチ
X-159.150
Y-36.370
X-159.150
Y-36.340
X-159.150
Y-36.310
0
30 m
1 : 300

図３　遺構平面図

井戸（SE01）

掘方は検出面では径 3.3 ～ 3.5m の不正円形で、検出した深さは約 4.6m であるが、掘方の基底は東西 1.4m、南北 1.5 mの楕円形であった。水溜めの深さは 60cm で、後述するように木枠組の井戸側であった。

レンズ状に堆積した最々上層の灰褐色土の埋土を除去すると、最上層にあたる径約 1.7m の円形落ち込みを検出した。最上層落ち込みは暗灰褐色土とそのまわりに褐灰色土が認められた。この層は45㎝の深さまで続いており、井戸廃棄後に掘削された可能性が考えられる。これらを除去すると四隅に径 20㎝の柱穴が認められ、その内側に東西 120㎝、南北 75㎝の楕円形の落ち込みを検出した。検出面から 50㎝で暗灰色粘土の埋土を検出し、それが約 25㎝続いた。それを除去すると検出面から約70㎝で川原石とともに完形に近い土師器が数個出土した（最上層土器溜まり）。

四隅の柱は東西 1.3 m、南北 1 mの間隔があり、覆屋があったと思われるが、井戸の上部構造の詳細は不明である。それらを除去すると木製の井戸枠が姿を現し始めた。

井戸枠は大きく 4 種類の木枠組を用いている。一番上から丸太横相欠き組部、縦板組薄板横桟留型部、横板組井籠型部、枡部である。木枠全体は底から上部まで約 3.3 mを測る。

T.P.22.7m で検出した丸太横相欠き組部は、井桁として幅 24㎝、長さ 140㎝、厚み 10 ～ 15㎝の丸太材を一段相欠き組にしていた。外法で 145㎝、内法 120㎝を測る。丸太材の一部には枘穴が開けられており、建築部材の転用と考えられる。なお、この上段では腐敗が著しく、構造は不明だったが横方向の木材を確認した。

T.P.22.55m では縦板組薄板横桟留型を検出した。四隅に縦方向の隅板を置き、長さ 90 ～ 100㎝、厚み 2 ～ 3cm、幅 20㎝を測る縦方向の薄板を一辺に 8 枚前後を用い、一部二重になっているところがあった。内側は幅 10㎝、長さ 90㎝、厚み 5㎝を測る横桟で留めていた。外法で 117㎝、内法で 102㎝を測る。この縦板の下部 T.P.21.85m は暗黄灰色粘土で固め、この内側に下部の横板 1 段目を約 20cm 入れ込まれた状態で検出した。

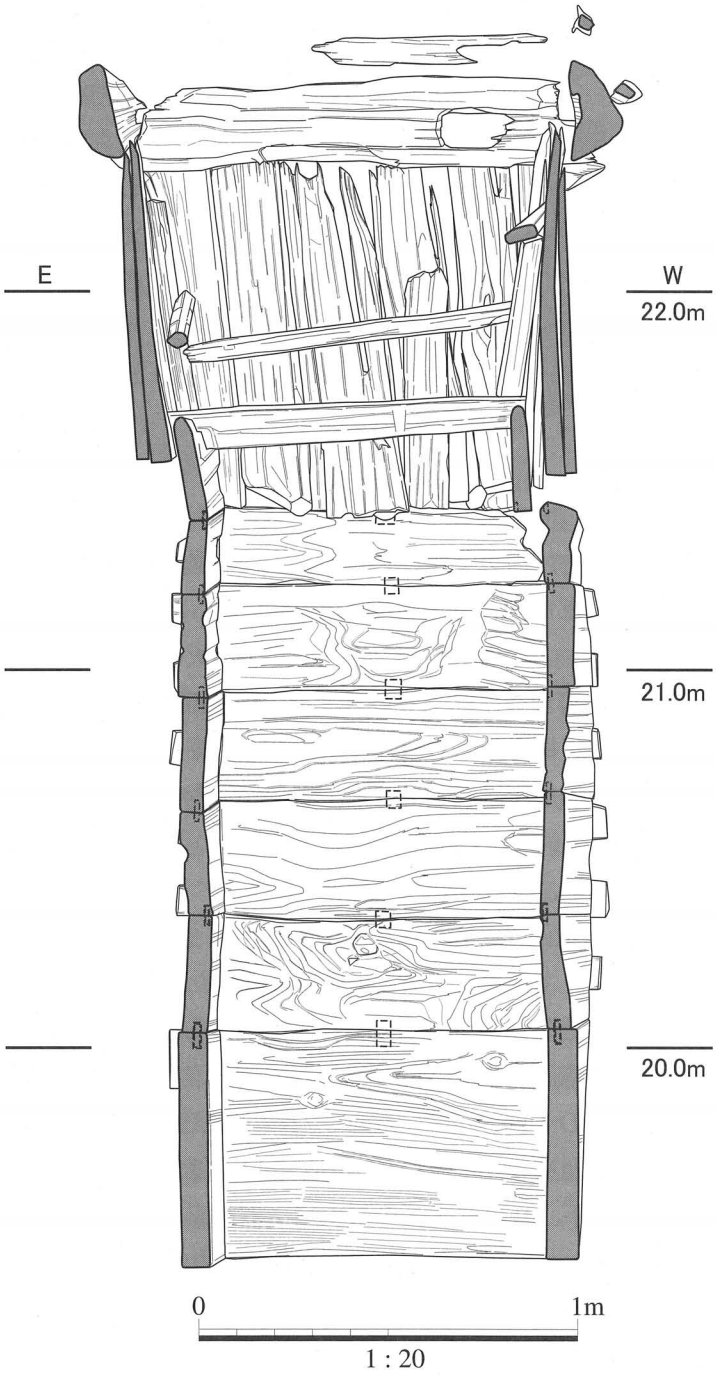


図 4　井戸枠立面図

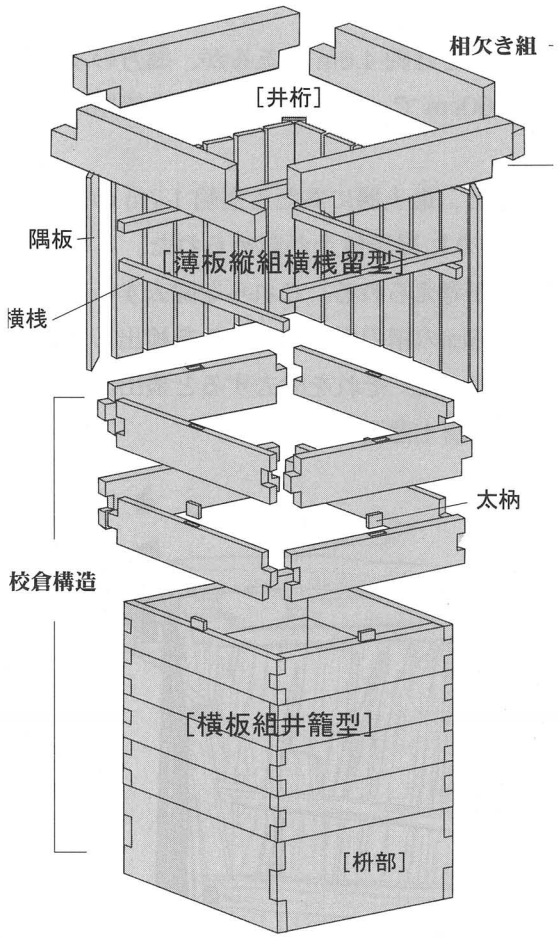


図５　組立式井戸枠模式図

T.P.21.7m で検出した横板組井籠型は基本的に厚さ約 8㎝、幅約 30㎝、長さ 110㎝で両小口に長さ 10 ～ 12cm、幅 10cm で凸形にした板と、長さ 10 ～ 12cm、幅 10cm の抉りを入れ凹形にした板とを用いていた。また、上部の縦板に入れ込まれた状態で幅 20㎝前後の狭い横板が出土しており、これを含めると凸形 12 枚、凹形 12 枚を組み合わせていた。

これらを各段揃えながら上下を太枘で結合して井籠型（校倉構造）に６段積んでいた。下から４段までは幅 30㎝であったが、上から２段目までは残存が悪く、横板６段を合わせると 170㎝になった。横板の底と枡部とも太枘で止められていた。

T.P.20.5m で検出した枡部も厚さ 8㎝、幅約 60㎝、長さ 110㎝の両小口に長さ 10㎝、幅 30㎝で凸形にした横板２枚と、長さ 10㎝、幅 30㎝の抉りを入れて凹形にした横板２枚を用いて井籠組みされている。凸形の１枚には横 3㎝、縦 6㎝の穴が開いていた。転用材を用いた可能性がある。外法 98㎝、内法は 90㎝を測る。

横板組井籠型技法は、板の大きさを揃える必要があり、枘で留めるなど、高度な技術力が必要で、平城京や平安京で見られるものと遜色ないものである。

また、掘方は中央部が膨らみ、最大で径約 3.4 m、検出面で広がる断面壺形になっており、水溜めのために枡部底よりさらに約 50㎝深く掘られていた。埋土は井戸枠までが灰褐黄色土、縦板組部が淡青灰色シルトから粘質土、横板組部が青灰色砂系、枡部が暗青灰色シルト、水溜部（落ち込み埋土）が砂混じり暗青灰色粘土である。地山は枡部付近 T.P.19.8m までが褐色砂礫、それ以下が青灰色シルトであった。掘方からも遺物が出土した。掘方の底は T.P.18.9m であった。

井戸枠内の埋土は細かく分層できなかったが、ほとんど暗灰色系粘土で、２～５回に分けて、遺物を取り上げた。

遺物出土状況

井戸枠より上を最々上層と最上層に分けた。最々上層は井戸検出面の埋土で細片の遺物のみである。最上層落ち込み（最上層 a）からは井戸廃絶後に埋められた土器と考えられる、灰釉陶器、緑釉陶器など特殊な土器を中心として出土しており、何らかの儀式を行った可能性がある。それらを除去すると灰色粘土の１回目（最上層ｂ）を検出した。なお最上層ｂからはあまり遺物が出土しておらず、一部最上層ｃと重なって遺物が出土している部分もあるため同じに取り扱った。

１回目の下、井戸枠上面の最上層土器溜まり（最上層ｃ）からは、小石等と混ざって土師器甕、坏などが出土しており、井戸廃棄時の儀式がなされた可能性を考えたい。

検出面から 80㎝の上層（２回目）からはあまり土器は出土していないが、中層に近いところでほぼ完形の台付き甕（194）が出土した。

中層は２層に分けた。検出面から 1.4 mの中層上（３回目）からは甑（209）、甕、鉢（210）、坏

などが固まって出土した。縦板から横板へ変わる部分であることを重視すると、これも何らかの儀式に関連している可能性が考えられる。また、検出面から2.3mの中層下（4回目）からは多量の甕を中心に坏などの土師器とともに刀子や櫛などが出土した。

検出面から2.9mの下層（5回目）からは、坏を中心とした多くの土師器とともに曲物が出土しており、釣瓶の可能性がある。

検出面から3.4mの最下層からは目立った遺物はほとんど出土しなかった。

枡部の下、落ち込み埋土からは、土師器の甕、壺、坏の他、須恵器の坏が2個体ほぼ完形で出土した。

掘方からも少ないながら土師器、須恵器が出土している。井戸枠より上を掘方上層、下を掘方下層とする。

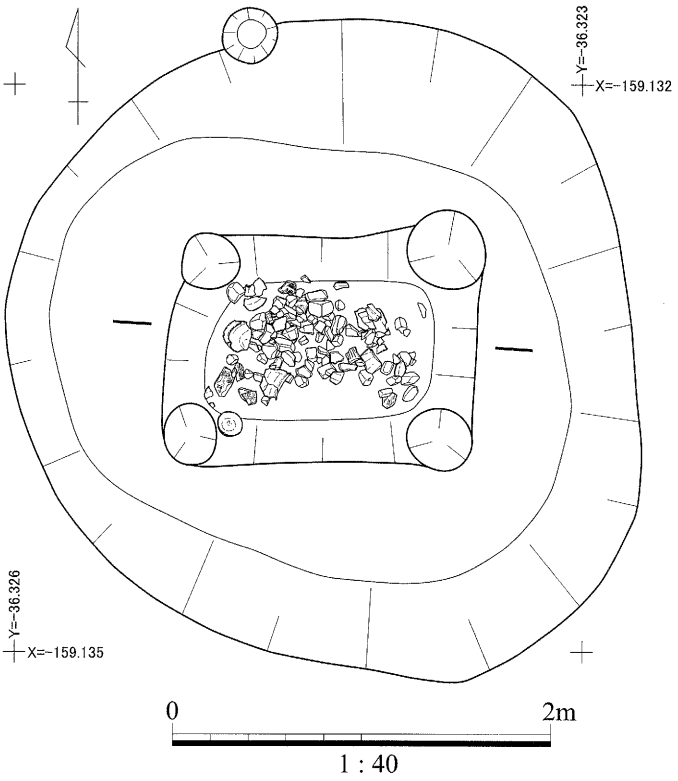


図6　井戸枠最上層遺物出土状況

出土遺物

SE01からは、大量の土師器のほか、須恵器、施釉陶器、木器などが出土した。報告は層位的に行うが、その様相については重なる点が多いため、まず、その分類や編年要素などについて説明を加える。

土師器　坏、椀、皿、盤、甕、把手付き鍋、鉢、羽釜、高坏、甑などが出土した。

坏：高台の付くB類、付かないA類とに分けられる。また、平城宮坏Aと類似し、口縁端部に面をもたせるものを坏Eとする。口径の大きなものには内外面にミガキや暗文を施すものもある。時期が下るほど、口径が小さくなる傾向にある。

坏A、Bの形態については、口縁端部の形態、底部の形態で分類した。口縁端部は外面に面をもたせやや内側に屈曲するもの（a形態）、段をもって逆「く」の字状になったもの（b形態）、外反するもの（c形態）、内彎するもの（d形態）、まっすぐに伸びるもの（e形態）に分けられる。e形態は端部がまっすぐで、やや外反気味のe1形態と内彎させるe2形態に細分できる。底部は上げ底気味になったもの（1形態）、平底に近いもの（2形態）、丸底に近いもの（3形態）に分けられる。

また、外面には手のひら全体でのオサエが顕著で、内面には右上がりの斜放射状の工具痕が認められるものがある。また、坏A、Bの中には黒色土器を意識したのか、内面が暗褐色から黒褐色になったものも認められる。なお、これら坏は器高と口縁部径の割合「径高指数」で表す。

椀：口縁部が内彎気味に立ち上がるもので、黒色土器に多く認められる。高台の付くBと付かないAとがある。

皿：器高に対して口径の大きなもので、口縁部の形態は坏に準ずるが、端部は肥厚するもの（a形態）と、しないもの（b形態）とに分けられ、暗文のあるものと、ないものとがある。また、口縁部径10cm以下のものは小皿とする。高台の付くB類と付かないA類とがある。

盤：大型の皿で口縁部が外反するもの（A形態）、直立するもの（B形態）、斜め上方に開くもの（C

形態)、内彎するもの（D形態）がある。端部を丸くおさめるもの、つまみ上げるものがある。

甕：球形に近い甕Aと胴部が張らずにまっすぐで下膨れの甕Bとがある。

口縁部の形態は、外反するもの（A形態)、直立するもの（B形態)、斜め上方に開くもの（C形態)、内彎するもの（D形態)、水平近くに折れ曲がるもの（E形態）に分けた。また、口縁端部の形態によって、端部が段をなすもの（a類)、丸くおさめるもの（b類)、端面に面をなすもの（c類）に分類し、端部外面をつまみ上げるもの（1類)、端部内面をつまみ上げるもの（2類)、つまみ上げないもの（3類）に分けた。また、端部が内彎するもの（A)、直立するもの（B)、外傾するもの（C）がある。

体部は胴部最大径が器高中央より上にあるもの、ほぼ中央にあるもの、下にあるものなどに分けられるが、これは胴部最大径のある位置の底部からの距離と器高の割合で示す。これを「最大径率」とする。胴部最大径は上にある方が古い形態で、時期が下ると球形から下膨れと移行する。また、胴部の張りをみるため、口縁部径に対する胴部最大径の割合で示す。これを「径胴指数」と呼ぶ。高いほど古い様相であることがわかる。

また、古代土器研究会によって径高指数が90前後のものをA、120～130をB、160前後をCに分けられている。

台付き甕：ハの字状に開く高い高台の付くものである。これは甕A、Bともに認められ、注口の付くものもある。甕Bで高台の付くものは、平城宮では鉢Fとしている。

小甕：口径10cm前後のものである。なお、壺に含めた方が理解しやすいものもあったが、ここでは小甕に含め、ここの説明で分けたいと考える。径胴指数から小甕の方が、普通の甕より古い形態であることがわかる［小森1996］。

把手付き鍋：壺、鉢、鍋のどの形態に属するか判断しがたいが、現代のミルクポットに類似するため鍋とした。上方に伸びる把手が付く。片側に注口を備えるもの（a類）と付かないもの（b類）がある。把手の断面が円形に近いもの（a類)、扁平に近いもの（b類）とに分けられる。

鉢：口縁部の内彎するもの（A形態）と外方に伸びるもの（B形態)、直立するもの（C形態）とがある。また、片側に注口を備えるもの(a類)［片口鉢］と付かないもの（b類）がある。

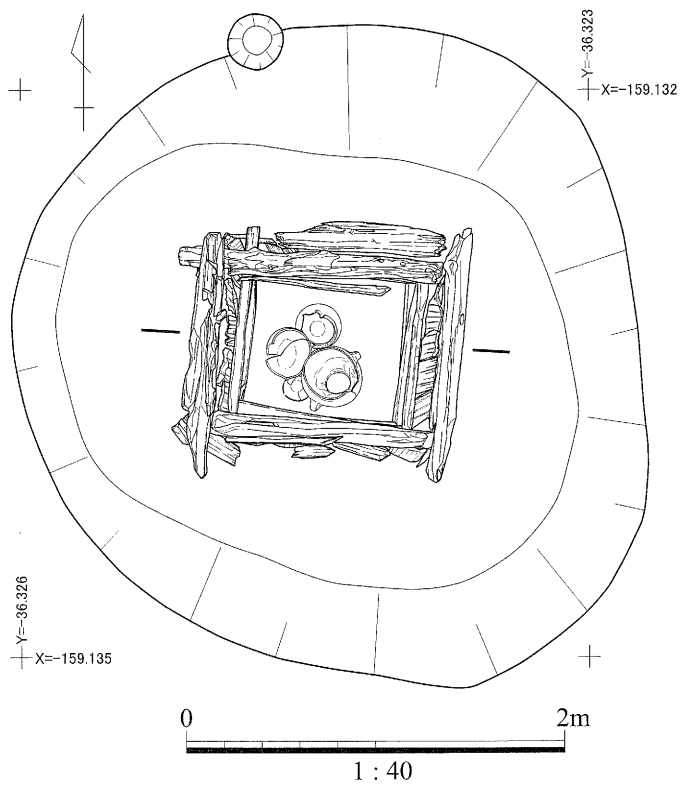


図7　井戸枠出土状況

羽釜：口縁部の形態及び体部の形態、指数は甕に準ずるが、鍔の形態によって分けられる。基部に比べ短く伸び断面三角形に近いもの（a類)、長く伸びるもの(b類)、端部を丸くおさめるもの（c類)、面をもたせるもの（d類)、尖り気味になるもの（e類）がある。

高坏：坏部が大きく開き水平に近くなったもので、脚柱部は中空のもの（a類)、中実のもの（b類）があり、外面に面取りするもの（1類)、明瞭な面取りしないもの（2類）とがある。脚裾部は大きく開き端部は強くなでている。

甑：大型の樽形で筒状の体部の両方に環状の把手の付くものである。時期が下ると把手が扁平になる。

黒色土器　坏、椀、鉢、甕などがある。土師器に準ずるが、椀形態が多い傾向にある。また、形態は普通の土師器坏であるが、内面を磨いており、黒色土器化しているものもある。

須恵器　あまり多くは出土していないが、坏、皿、壺、蓋、甕などがある。

坏・皿：高台の付くB類と付かないA類とがある。

壺：球形の体部に高台が付き、口縁部が長いA類と短いB類とがある。口縁端部の形態は上方へつまみあげるもの（a類）、ほぼ水平方向に折り曲げるもの（b類）、上下につまみ出すもの（c類）、下方へ垂下するもの（d類）、丸くおさめるもの（e類）である。平城宮では壺Lとしているものである。

小壺:平城宮で壺Mとしているものである。高台の付くもの(b類)と付かないもの(a類)とがある。底部は糸切り痕が残るものがある。

薬壺：短かく立ち上がる口縁部で、肩部に稜線をもつものともたないものがあり、底部には高台が付く。

蓋：平坦な天井部に宝珠形のつまみが付く。天井部から直角に屈曲した口縁をもつ。

施釉陶器　緑釉陶器と灰釉陶器とがある。高台は幅が広く中央部がへこむいわゆる蛇の目高台（a類）、細い輪高台をもつもの（b類）、内傾し僅かな凹みをもつもの（c類）、外下方に張り出し、端部外面を丸く内方へおさめるもの（d類）、断面が三角形を呈し、ほぼ垂直に付くもの（e類）、断面三角形を呈し、直線的に外下方に張り出すもの（f類）とに分けられる［古代土器研究会 1994］。

出土遺物の様相

井戸枠内からは多量の遺物が出土した。出土土器は出土状況で示した層位で説明を加える。

最上層a

土師器坏（6～8・10・11）、椀（15・16）、皿（17・18）、甕（120・121・123・125）、羽釜（19）、黒色土器皿（25）、須恵器（29・30）、施釉陶器（27・28）などが出土している。

土師器の坏の口径は坏Aで平均13.9cm、坏Bで平均15.5cm、口径指数は坏Aが26.5前後、坏Bが30前後である。口縁部の形態は6や7のように端部を強くナデ、外面に面をもたせ、やや内側に屈曲するものが含まれる。

椀（15・16）は両方とも高台の付く椀Bであるが、15は口径16cm、径高指数32.5であるが、16は小型品で深い。両者とも断面三角形の高台をもつ。

皿A（17）は口径14.8cmで径高指数10.1と低い。

皿B（18）は、口径18.2cm、径高指数20.3である。高い三角形の高台が付く。

甕は径胴指数84.1で短く外反するものが主であるが、口縁部を2段にナデるもの（125）がある。

羽釜（19）はSE01から唯一出土したものである。口縁部は断面が「く」の字形になっており、端部は内彎気味になっている。鍔は短く断面三角形に近くなっている。

須恵器皿B（30）は口径16.2cm、径高指数20.9を測る。これは土師器皿B（18）とともに施釉陶器を模倣したものである。

蓋（29）は口径12.8cm、器高2cmを測る。天井部を丁寧になでているため蓋としたが、皿の可能性も考えられる。

施釉陶器（27）は灰釉小皿で内面に段をもつ段皿といわれるもので、やや内彎した高台が付く。緑釉陶器椀（28）は蛇の目高台である。

最上層b・c

土師器坏（1・2・4・5・12・14）、甕（118・119・122・127・128）、椀（3）などが出土している。

土師器の坏の口径は坏Aで平均12.2cm、坏Bで平均15.8cm、口径指数は坏Aが27.8前後、坏B

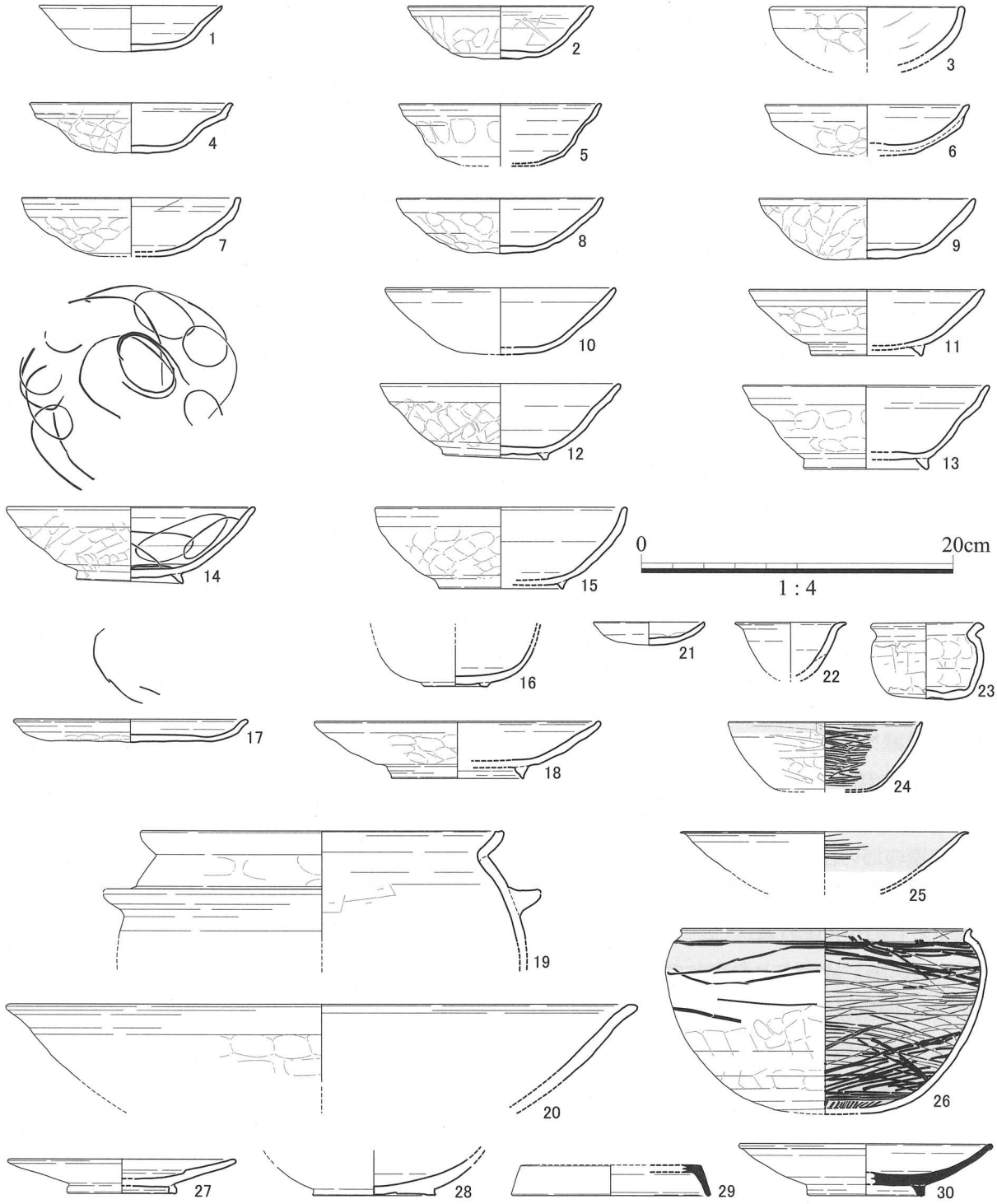


図 8　SE01 最上層・上層出土土器実測図

が 29 前後である。14 の坏 B の内面には螺旋状の暗文が施されている。

甕は径胴指数 85.7 であるが、小型品は指数が高いためそれ以外だと 82.81 になる。小型品（118・119）は口縁部が外反し、端部は丸くおさまっているものである。

椀（3）は口径 12.4㎝で内彎し、端部は丸くおさめるものである。

上層（2 回目）

土師器坏（13）、盤（20）、甕（124・126・129 ～ 131）、台付き甕（193）、黒色土器椀（24）、鉢（26）、ミニチュア（21 ～ 23）などが出土している。

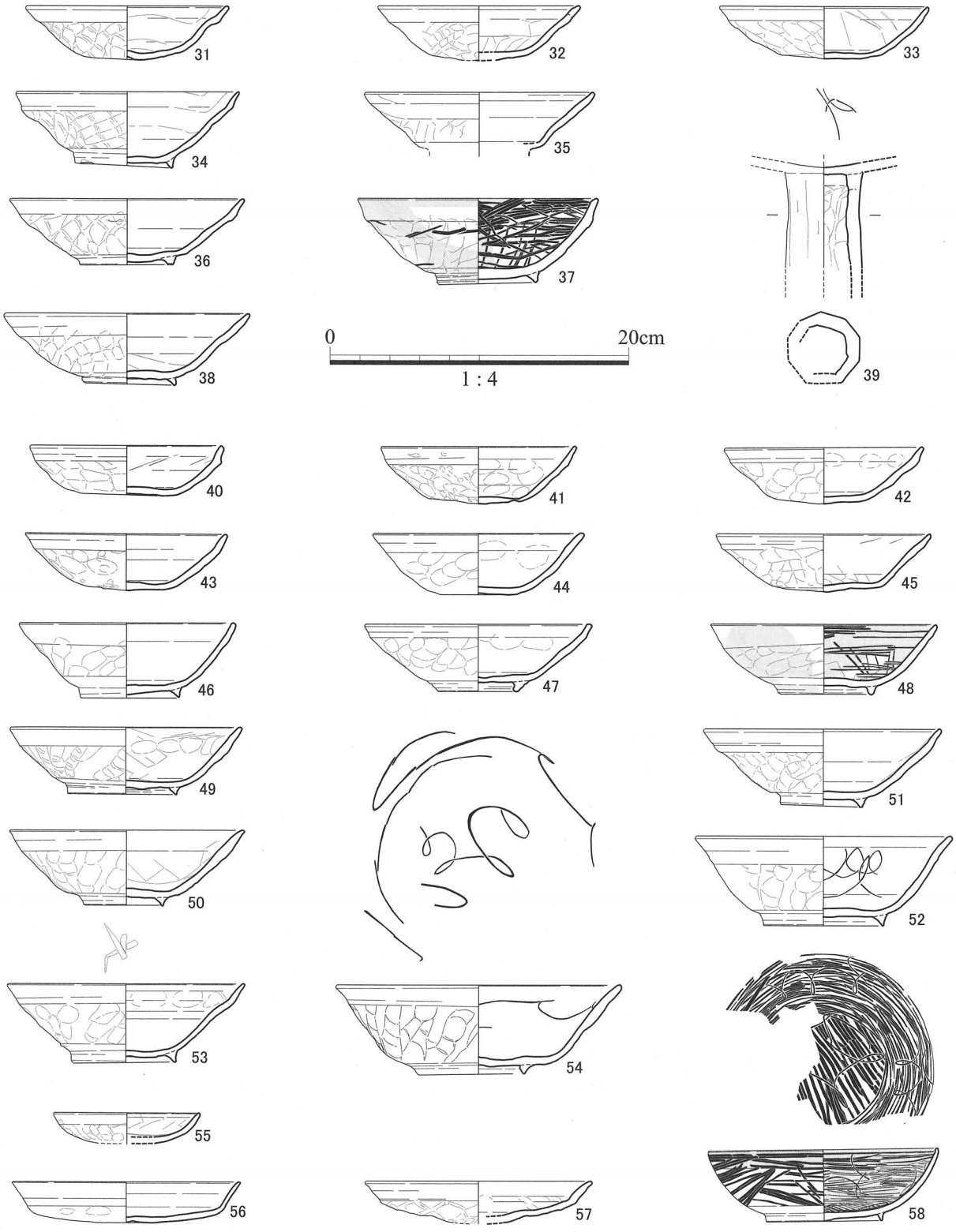


図 9　SE01 中層出土土器実測図

土師器坏の口径は坏 A が平均口径 13㎝、口径指数 26.9 前後、坏 B（13）で平均 16.4㎝、口径指数 28.1 前後である。

盤（20）は、口径 40.5㎝の大型品である。

甕は径胴指数平均 79.6 で、口縁部形態は直立気味に立ち上がり端部に面をもたせるものが中心である。

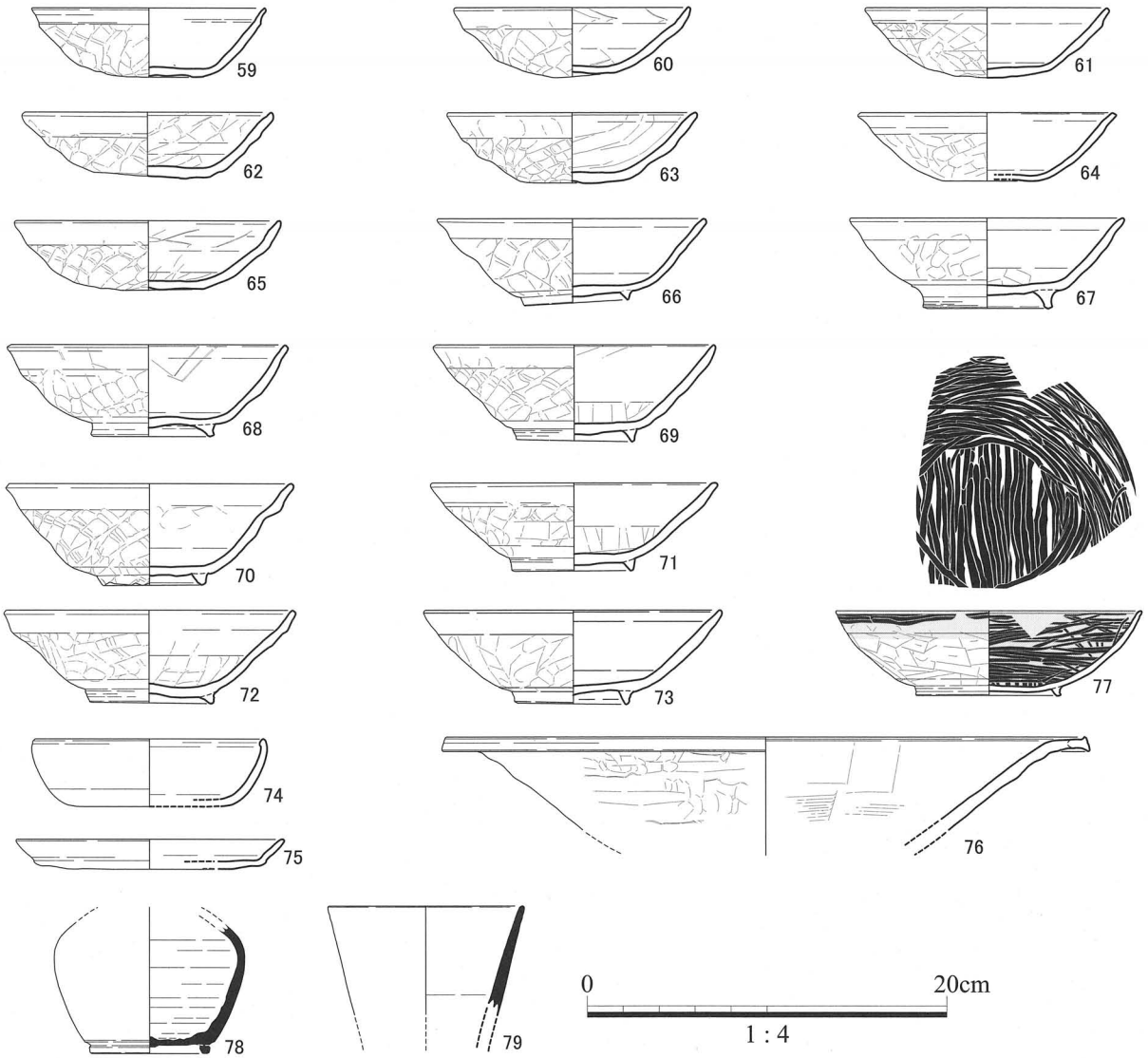


図 10　SE01 下層出土土器実測図

台付き甕（193）は、球形に近い体部で口縁部は強く外反し、端部をつまみあげるものである。

黒色土器には椀（24）と鉢（26）とがある。鉢は口縁部が内彎するタイプのものである。

ミニチュア品としては小皿（21）、壺（23）、甑（22）が認められ、これらは関連がある可能性がある。小皿（21）は口径 7㎝、径口指数 21.4 である。

中層上（3 回目）

土師器坏（31 ～ 36・38）、高坏（39）、黒色土器坏（37）、甕（132 ～ 143・196）、台付き甕（194・195）、把手付き鍋（202 ～ 207）、特殊甕（208）、鉢（210・211）、甑（209）などが出土している。

土師器坏の口径は坏 A で平均は 13.5cm、径高指数 26.6、坏 B で平均 15.6、径高指数 31.7 を測る。土師器坏の口縁部は外方に伸び端面が丸いものが多いが、強いナデで屈曲させるものもある（31・34・35）。坏 B の高台は断面三角形のものが中心である。

37 は形態が坏であるが、黒色土器と同じように、内面に丁寧なミガキがなされており、煤が付着している。39 は高坏で脚部は中空になっており、軽く面取りが施されている。

甕は径胴指数平均が 83.1 前後である。132 ～ 134 のように小型品もある。小型品の口縁部は短く立ち上がり、端部は丸くおさめているものであるが、他の甕の口縁は短く外方に伸び、端部は面をな

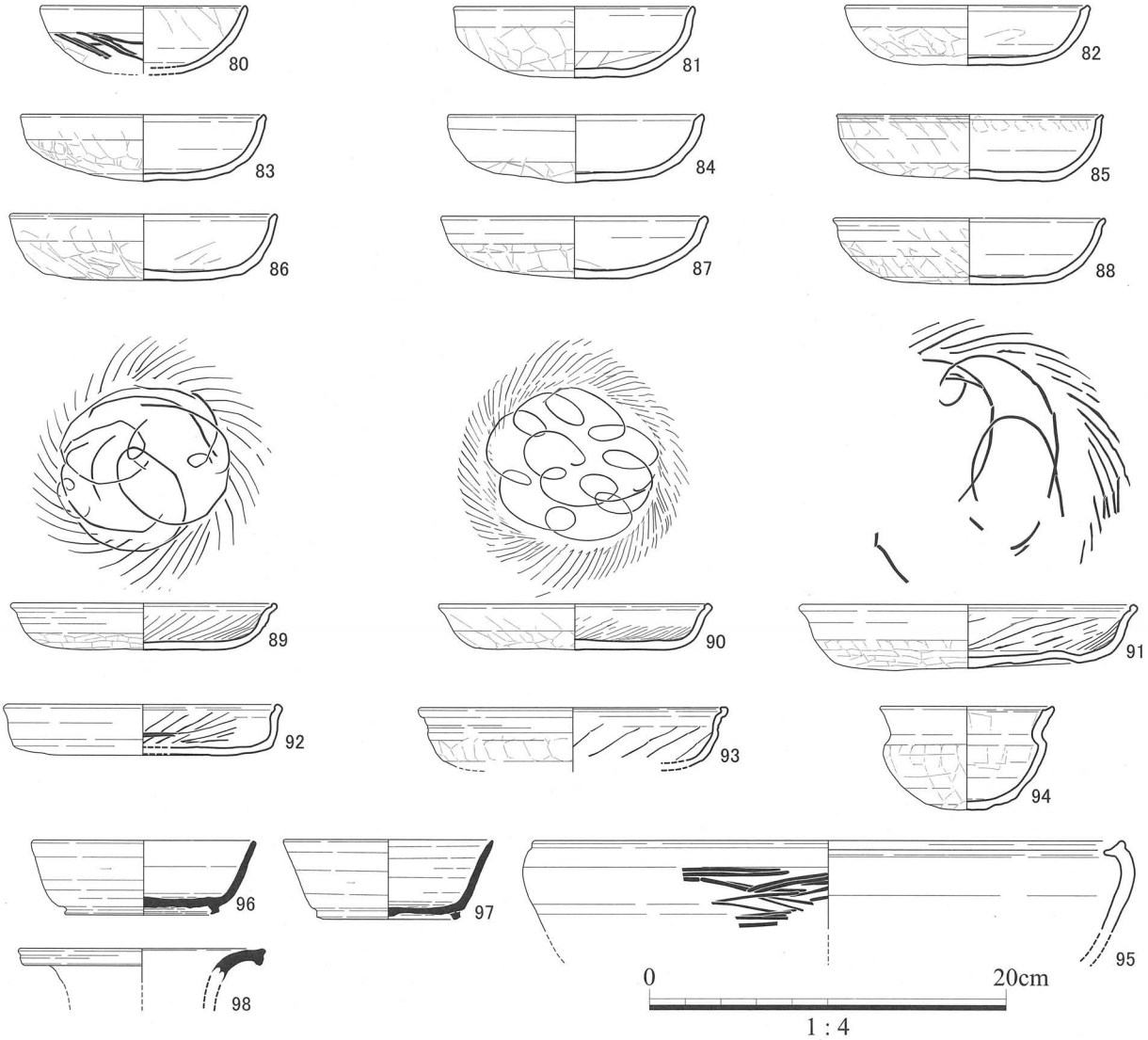


図 11　SE01 落ち込み埋土出土土器実測図

すものが多いが、外面をつまむものや丸くおさめるものがみられる。

他には甕 B や台付き甕がある。台付き甕は外反した口縁部に注口を備え、球形の体部に高い高台が付くもの（194）と外方に立ち上がり、上部に胴部最大径があり、外面をミガキ、内面をヘラ状工具でナデるもの（195）がある。

また、甑（209）や鉢（210）、甕（141）、図化していないが、坏 A や皿などがまとまって出土した。甑は底部に向けてすぼまる円筒形の体部で、縦方向に環状の把手が付く。甑内からは口径 16.4㎝で径高指数 17.8 を呈する皿が出土した。甕（141）は口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部は丸くおさめており、底部内面には炭化物が付着している。鉢は 210 のように平底でほぼ直立する口縁部で注口があるものや、211 のように外方に開くものがある。

なお、この層からは、把手付き鍋が多く出土しているのも特徴である。把手付き鍋は KT91 － 3 区、KT99 － 11 区など他の調査区でも出土しているが［上田 1991、新開 2010］、今回のものは把手の断面が円形で、注口が認められない。特殊甕は口径部の下に四方向に孔が開けられており、蓋を固定するための孔と思われる。

中層下（4 回目）

土師器坏（40 ～ 47・49 ～ 54）、皿（55 ～ 57）、黒色土器坏（48）、椀（58）、甕（144 ～ 175・

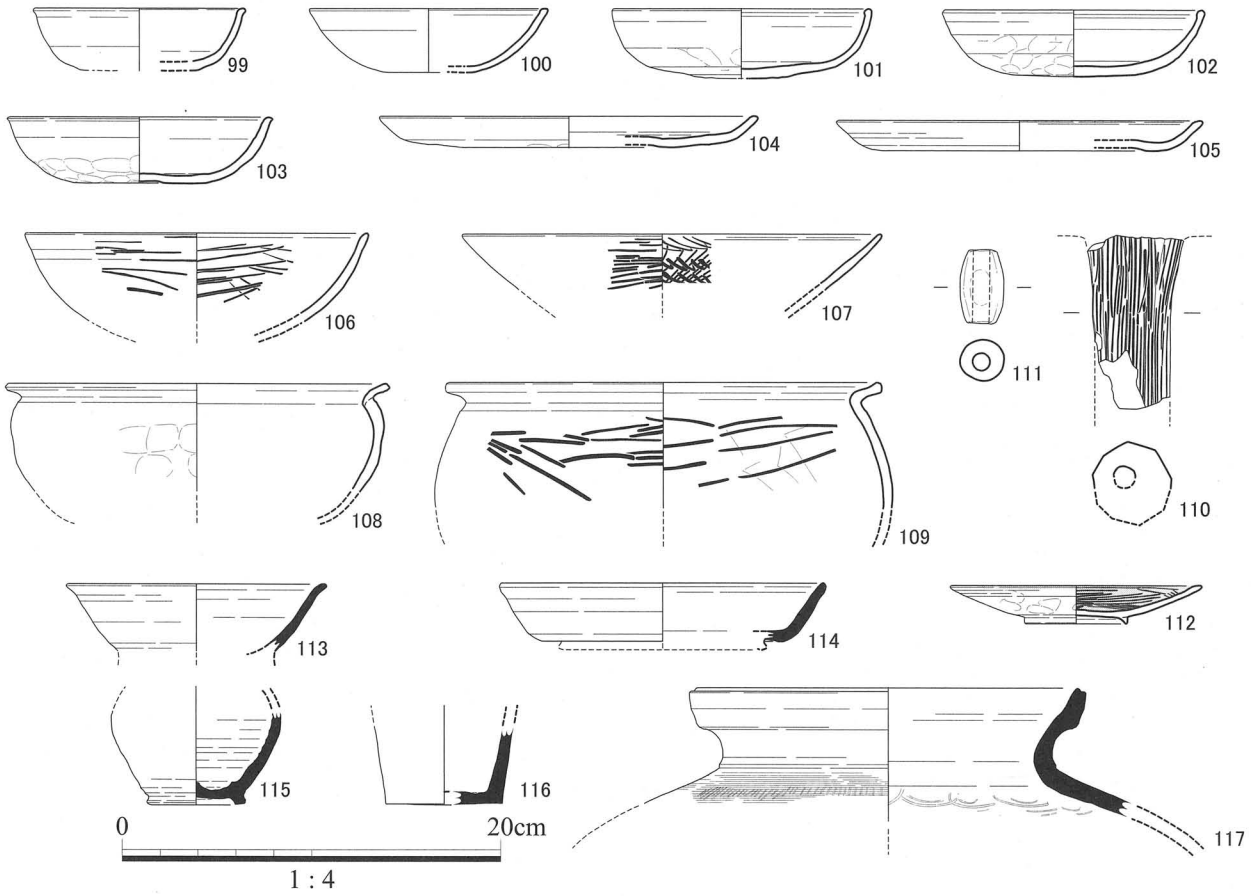


図 12　SE01 掘方出土土器実測図

200)、台付き甕（197 ～ 199)、鉢（212)、櫛（219)、刀子（220）などが出土した。

土師器坏の口径は、坏 A で平均 13.5㎝、坏 B で平均 15.5㎝と 3 回目のものとほとんど変わらない。また、ヒストグラムで見ると坏 A は 13.5 に集中し、坏 B は 16 に集中する。また、径高指数は坏 A が 26.2 前後、坏 B が 31.6 前後である。高台は断面三角形のものが多いが、3 回目のものより高い傾向にある。

なお、4 回目には坏 B で口径 19㎝、径高指数 30 前後の大型品がいくつか認められる。大型品には内面にミガキが施されている。

皿は口径 9.6㎝のものと 15cm 前後のものとが認められるが、後者は灯心の痕跡が認められ、灯明皿として使用されたと考えられる。

黒色土器坏（48）は中層上 3 回目の 37 と比較すると、口径、径高指数とも劣り、やや雑に作られている。37 の方が口径、径高指数、ミガキなど大きく、丁寧に作っている。

黒色土器椀（58）は底は縦方向、口縁部に横方向のミガキを施し、外面にも分割してミガキが施されている。内面見込みから口縁部にかけて螺旋暗文が認められる。

4 回目からは大量の甕が出土している。径胴指数は 86. 7 前後と 3 回目より高い。口縁部は「く」の字状に曲がり、端部は外側につまむものが多い。また、面をもった端部が外傾するものも少し認められ、屈曲し端部が丸くおさめるもの、内彎するもの、短く外方に伸びるものなど多様である。内面に炭化物が付着しているもの（147・151・158・160・161・167・171）も多い。また、外面の一部にミガキを施すものもある。146 のように内面にハケ目を施すものもある。底部はほとんどが丸底であるが、平底気味になるもの（167)、尖り気味になるもの（168）がある。甕 B は 3 回目と形はほとんど変わっていないが、比較すると口縁部が下方につまみ、外面にミガキを加えるなど丁寧なつ

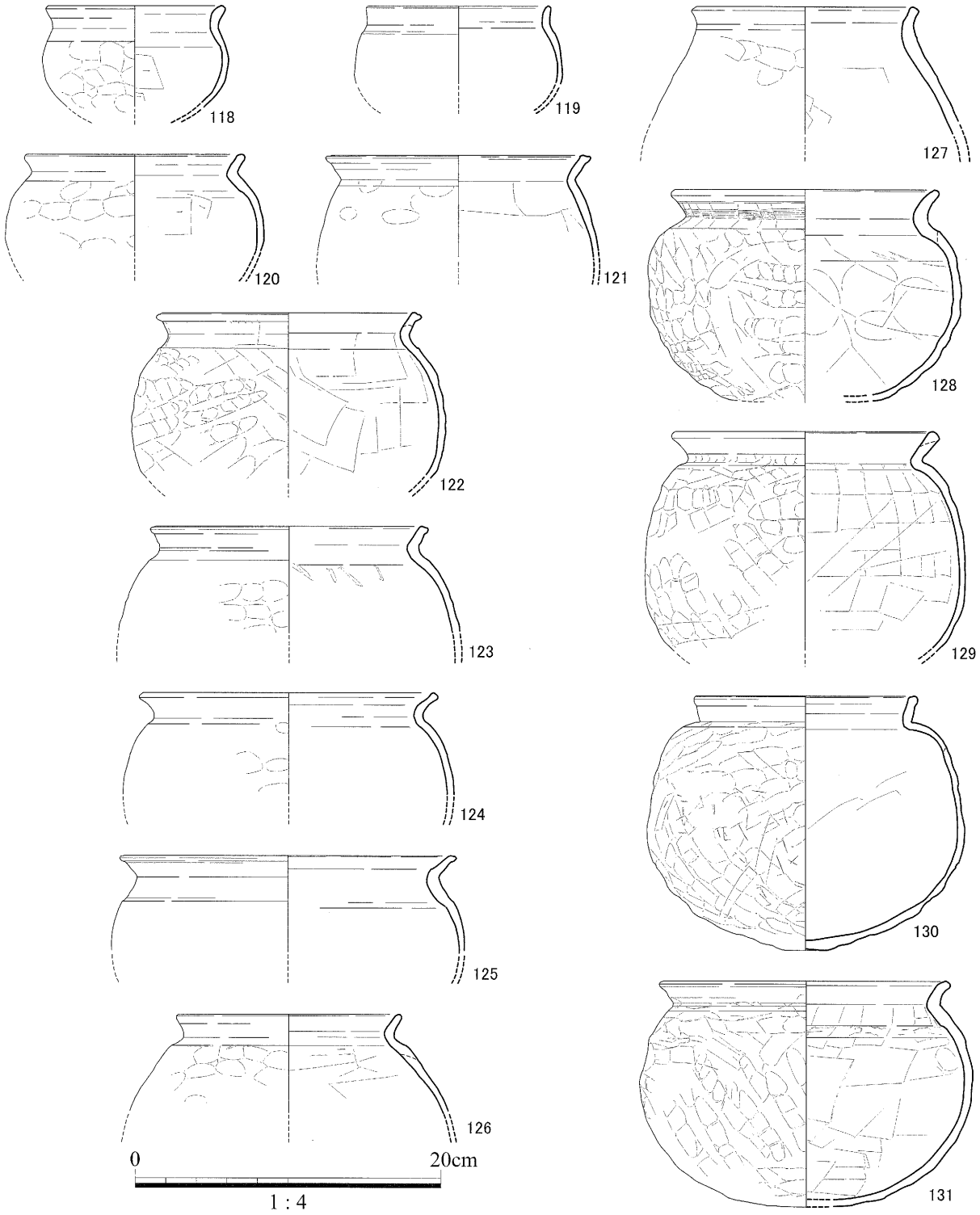


図 13　SE01 上層出土甕実測図

くりとなっている。

台付き甕（197 ～ 199）は、甕 A（197・198）・甕 B（199）両方があるが、3 回目と比較すると高台が張り、外面のミガキも増加する。

鉢（212）は口径 23.8㎝、器高 8.7㎝を測る。口縁部は大きく上外方へ開き、端部はやや内彎する片口鉢である。

櫛（219）は、幅 3.8㎝、長さは破損しているため不明であるが 2.5cm 内に 24 本の歯がある。

刀子（220）は先が折れているが、刀身は幅 1.2㎝、残存長 5㎝、鋲は残存長 4㎝である。

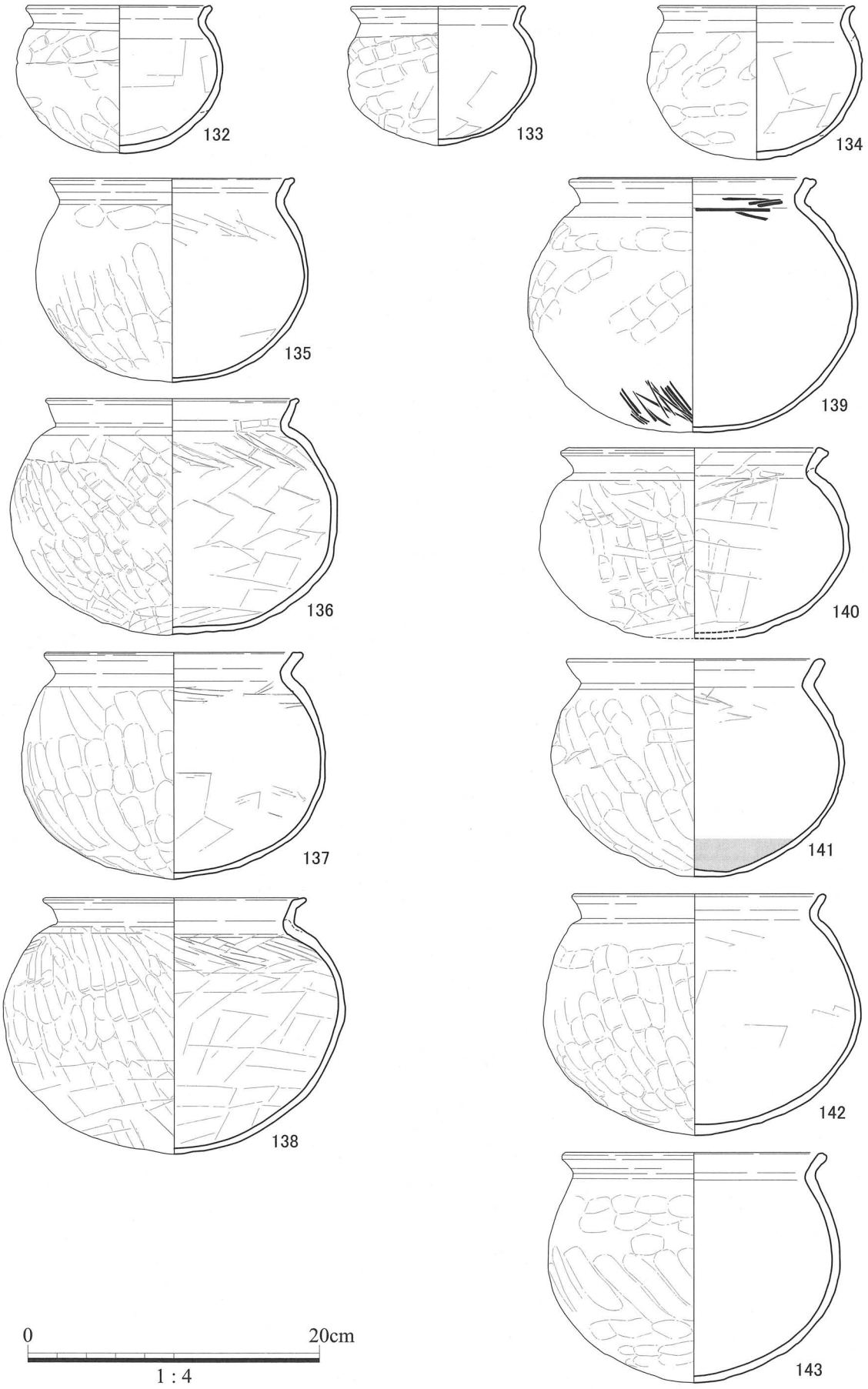


図 14　SE01 中層出土甕実測図 1

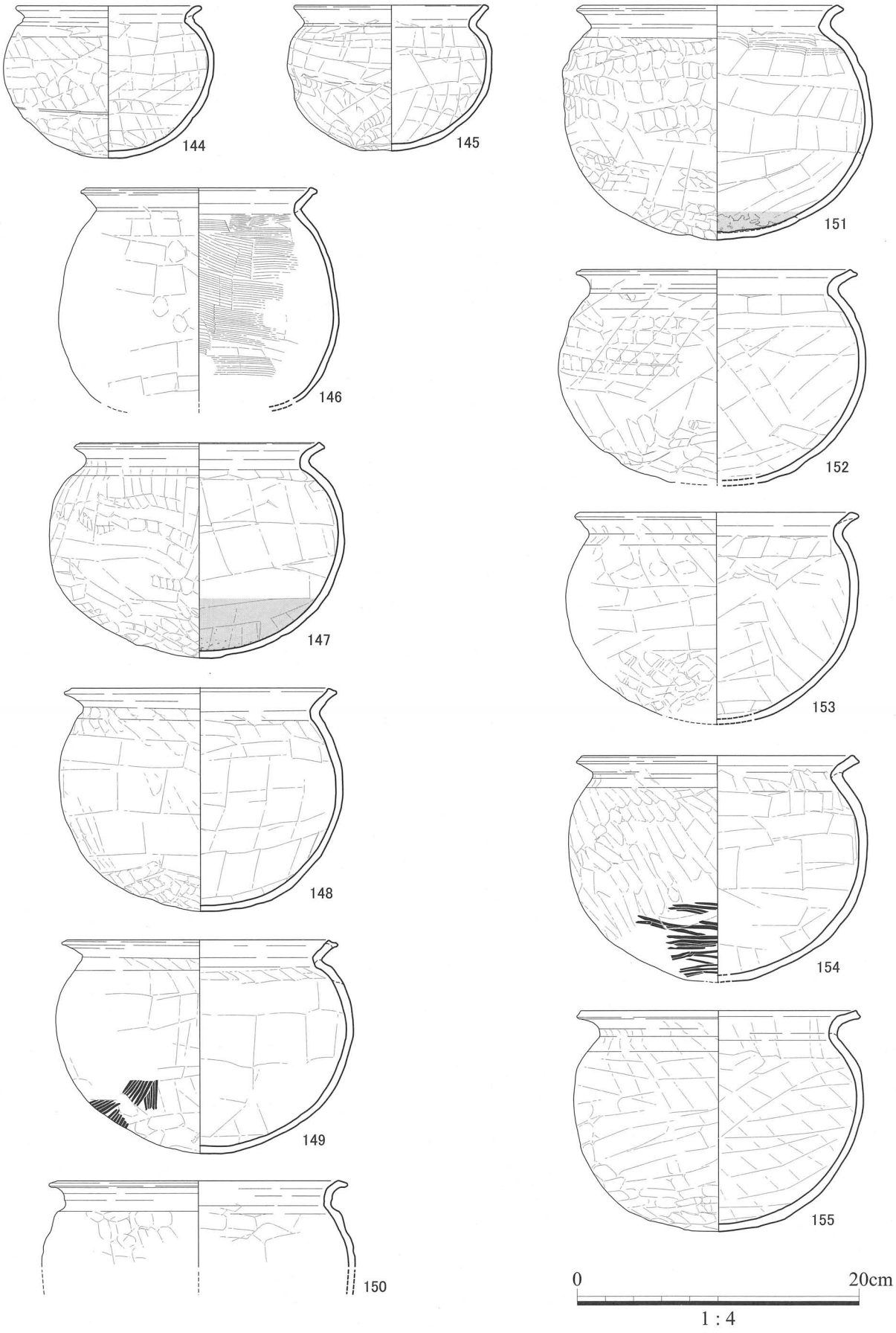


図 15　SE01 中層出土甕実測図 2

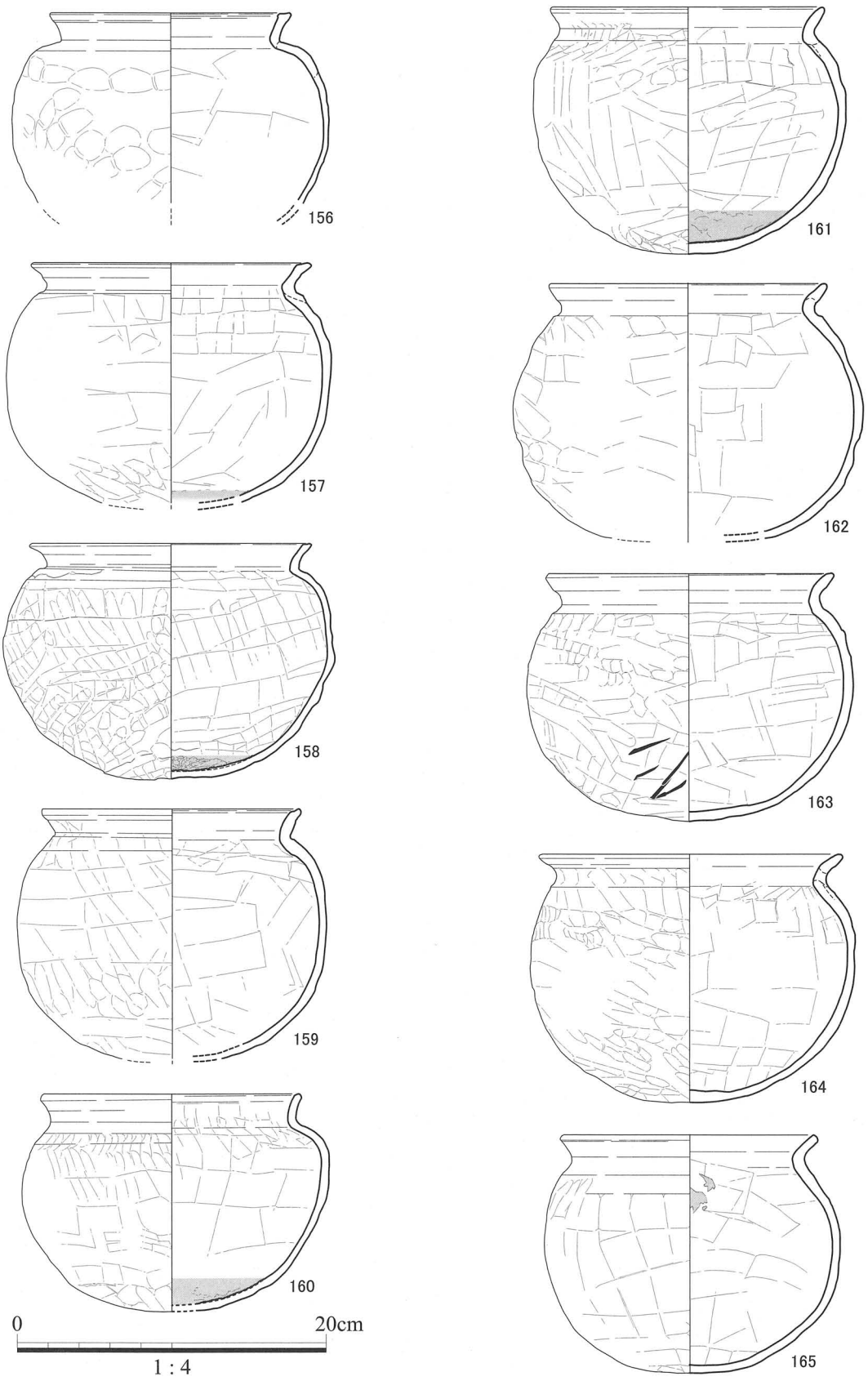


図 16　SE01 中層出土甕実測図 3

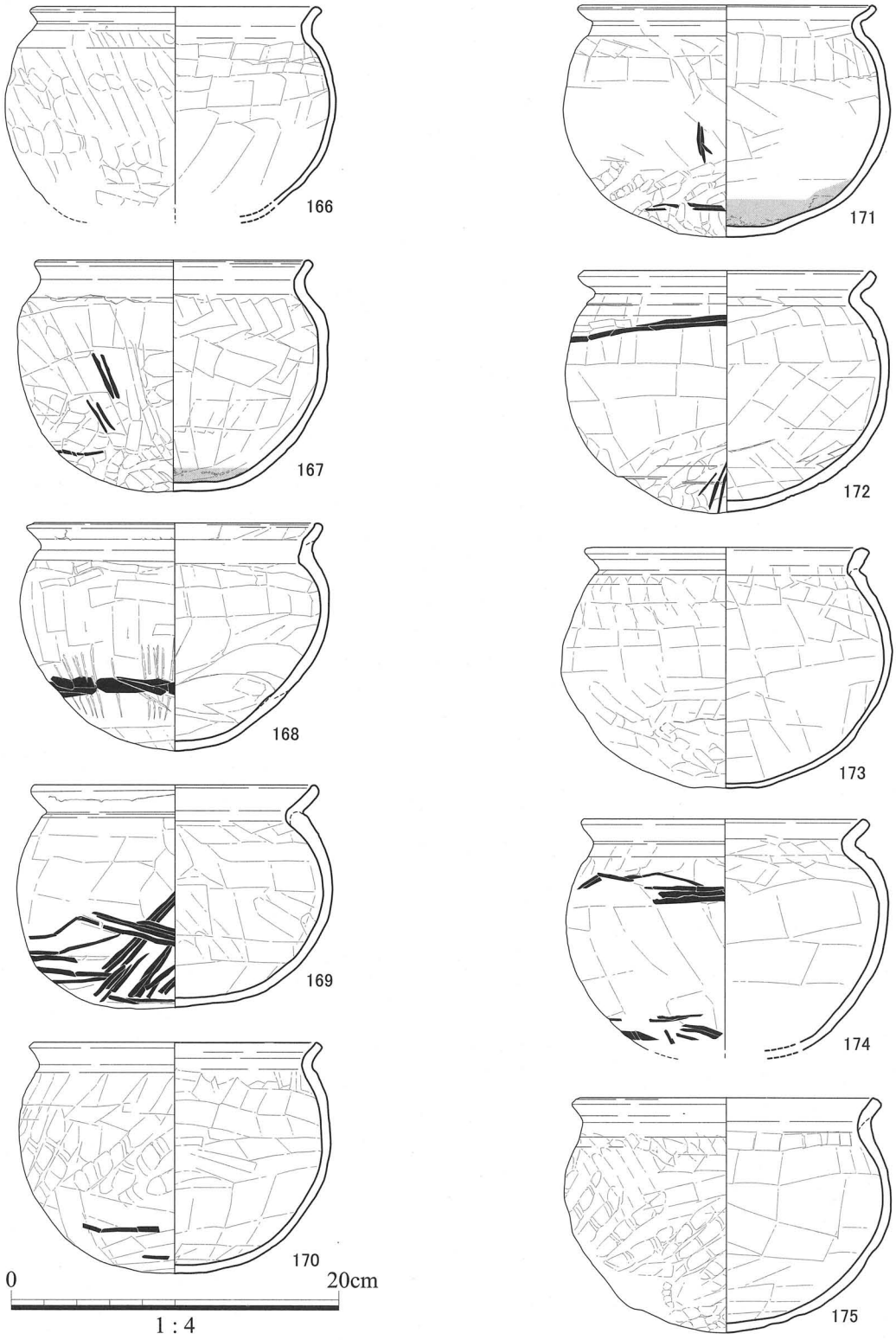


図 17　SE01 中層出土甕実測図 4

下層（5 回目）

土師器坏（59 ～ 73）、皿（75）、盤（76）、甕（176 ～ 178）、台付き甕（201）、鉢（74）、黒色土器椀（77）、須恵器壺（78・79）などがある。　土師器坏の口径は坏 A で平均 13.8㎝、坏 B で 15.6㎝、径高指数は 27.5 と 33.0 である。また、ヒストグラムで見ても坏 A は 14 に集中し、坏 B は 15.5 と 16 に集中する。口縁部は外方斜めに伸び、端部を丸くおさめるものがほとんどで、強いナデで面をもたせるものはほとんどない。坏 B の高台はすべて断面が高い三角形で、73 のように高く踏ん張る

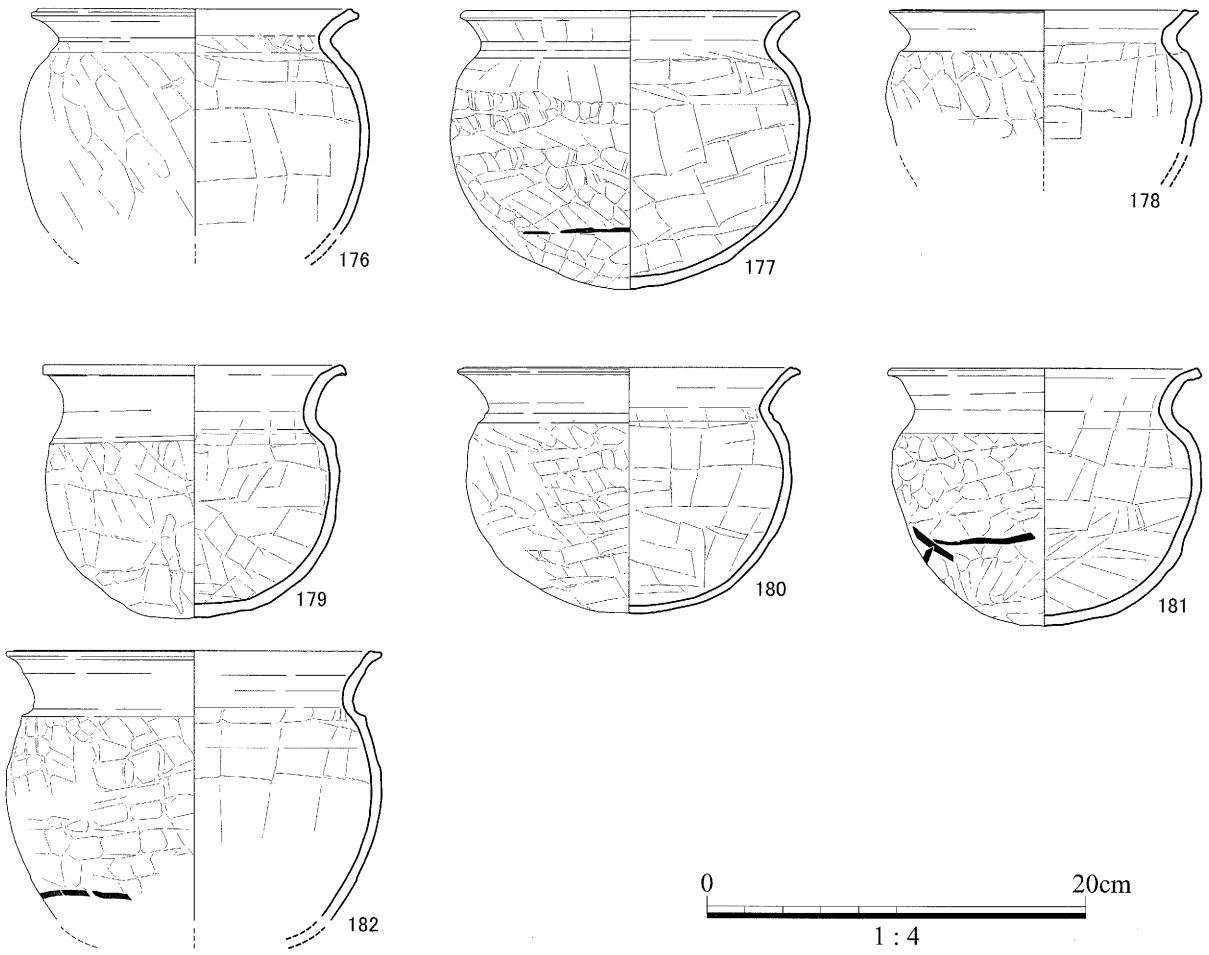


図 18　SE01 下層・落ち込み埋土出土甕実測図

ものも認められる。

皿（75）は口縁部径 14.8㎝で径高指数 11.5 と低いものである。

盤（76）は口縁部が斜め上方に伸びて屈曲させ端部に面をもたせており、高坏の口縁部である可能性もある。

甕（176 ～ 178）は、口径 15㎝（178）、17㎝前後（176・177）、図化していないが、19㎝前後、21㎝前後のものがあり、径胴指数は 90.1 前後である。口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は外傾するもの（176）、丸くおさめるもの（177）、外側につまむもの（178）などがある。4 回目と接合されたものもいくつかあるが、相対的に甕の出土が少ない。

台付き甕（201）は、甕 B に高台の付いたもので、体部外面にはミガキが確認できる。また、4 回目の 199 と比較すると、高台がさらに高く踏ん張り、ミガキも増加している。

鉢（74）は口縁部が内彎する器形で、口径 17.2㎝、径高指数 30.2 である。

黒色土器椀（77）は 4 回目のものより浅く坏形態に近い。外面は口縁端部のみ黒色になっているが、他は黒色土器 A である。

須恵器壺（78）は壺 L で卵形の体部である。79 は外反する口縁部で端部を丸くおさめている。

甕はあまり出土しなかったが、口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部が外傾するものが多い。径胴指数は 90.8 前後である。台付き甕（201）の高台はさらに高くなっており、外面のミガキも丁寧に施している。

落ち込み埋土

土師器坏（81 ～ 88）、椀（80）、皿（89 ～ 93）、甕（179 ～ 182）壺（94）、鉢（95）、須恵器坏

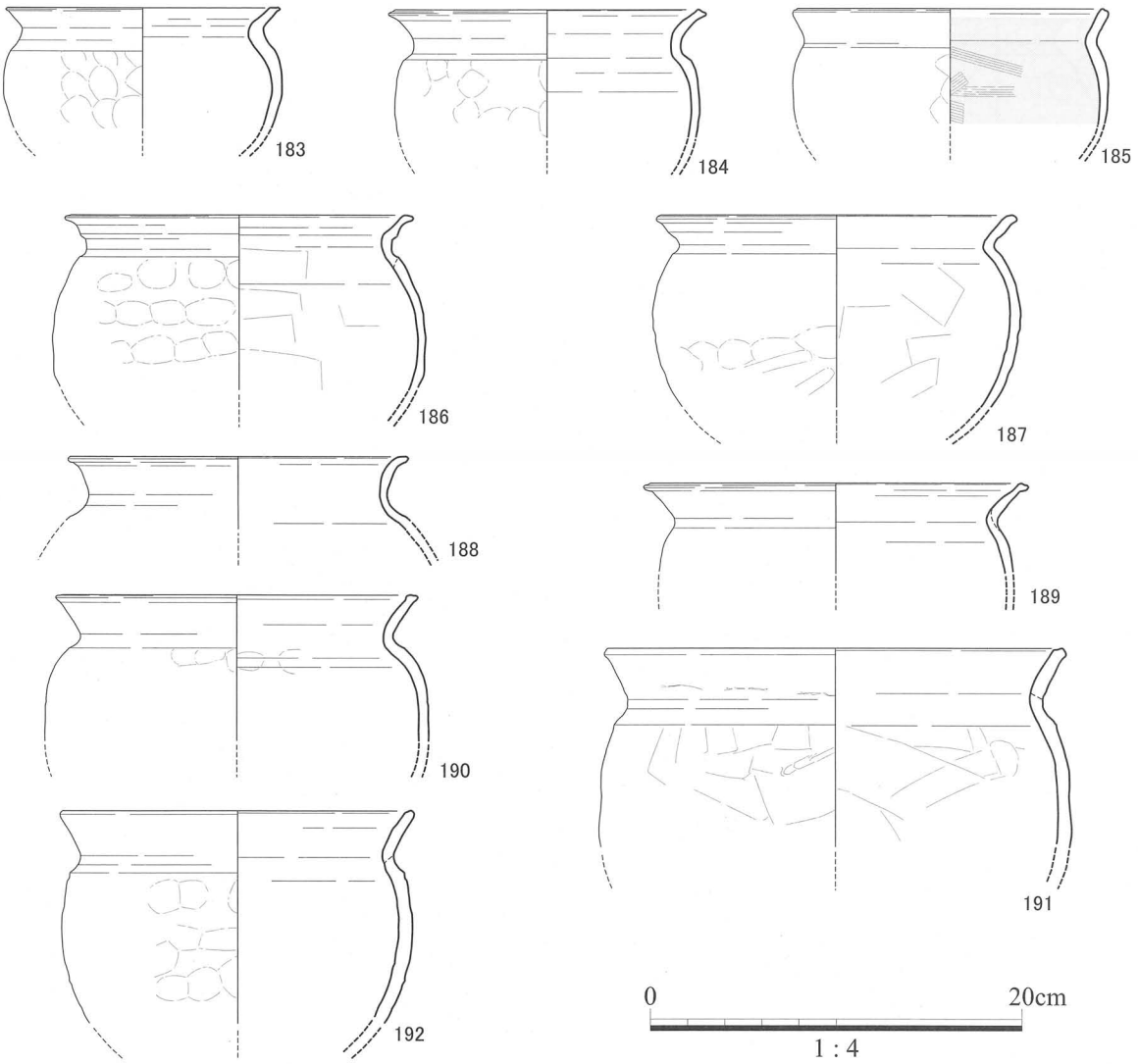


図 19　SE01 掘方出土甕実測図

(96・97)、須恵器壺（98）などがある。

土師器坏は今までの形態とは異なり、平城宮坏 A と類似し、口縁端部に面をもたせる坏 E である。口径の平均は 14.3㎝であるが、13.5㎝前後、14.8㎝前後に分かれる。径高指数は 26.4 である。内外面ともナデ調整で、暗文やミガキは認められない。85 のように底部に木葉圧痕があるものも認められる。

椀（80）は口径が 11.4㎝で径高指数 33.3 で井戸枠内の坏 A に類似するが、丸底で外面にミガキが認められる。

皿（89 ～ 93）は口径の平均 16.2㎝であるが、15㎝前後と 18㎝前後に分かれる。径高指数は 18.5 である。すべてに粗い放射状暗文と見込みに螺旋暗文が施されている。また、底部には木の葉痕が残る a 技法のものがある。平底から上方に開く口縁で、端部は巻き込んでいる。

甕（179 ～ 182）は口径 16㎝前後のものと、19㎝前後のものとがあるが、径胴指数は 99 前後と口径と胴部最大径がほぼ一致した器形である。強いナデのために口縁部と体部との間には段が認められる。口縁部は長く、外反するものが多く、端部は外傾するもの（179 ～ 181）が中心でその他、横方向に伸びるもの（182）や、外傾しているが端部はつまむために伸びているもの（179・180）もある。

壺（94）は口径 9.6㎝の小壺である。口縁部は短く外反し、端部には段がついている。

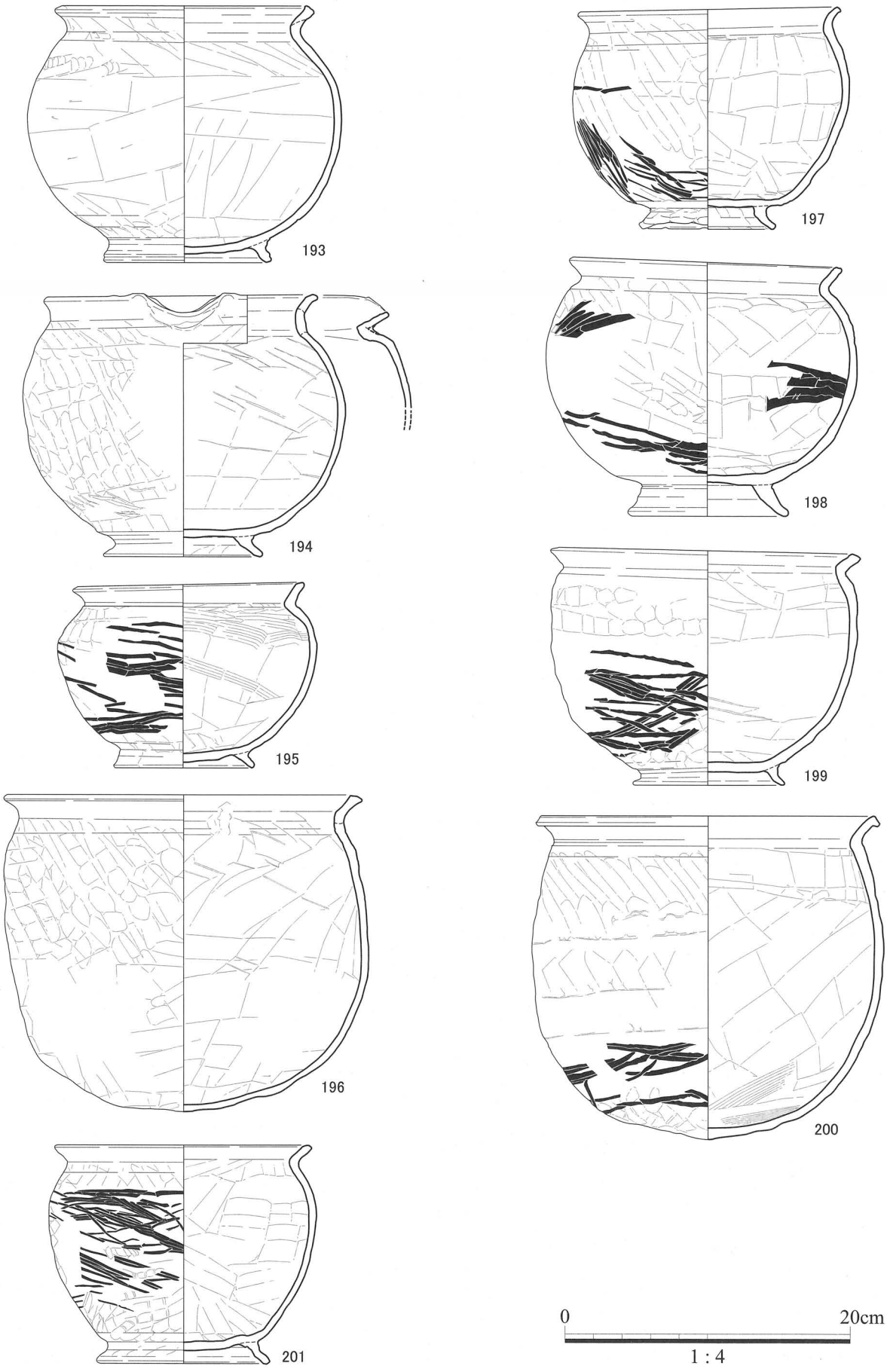


図 20　SE01 中層・下層出土甕実測図

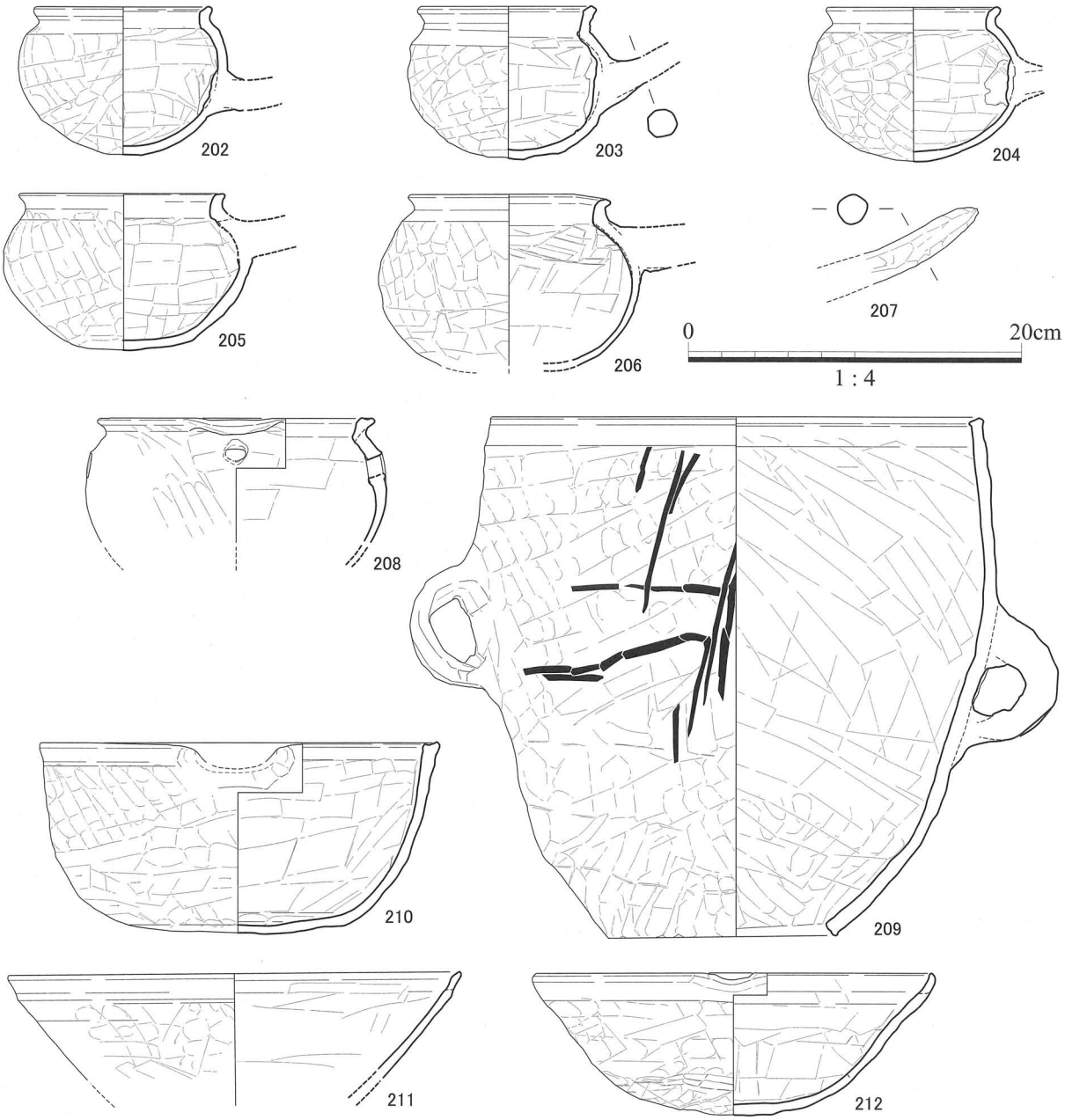


図 21　SE01 中層出土土器実測図

鉢（95）は口縁部が内彎するタイプで端部は上下に面をもたせている。体部外面にはミガキが施されている。

須恵器は坏（96・97）、壺（98）がある。

坏（96・97）は高台の付く坏 B で、斜め上方に開く口縁と中高の高台が付く。両者とも口径は 12 ㎝前後であるが、器高が 97 の方が高い。

壺（98）は口縁部のみの出土で大きく外反し、端部を上下につまみ出すものである。

掘方

土師器坏（9・99 ～ 103・107）、皿（104･105）、椀（106）、甕（183・184・186 ～ 192）、鍋（108・109）、高坏（110）、黒色土器皿（112）、甕（185）、須恵器坏（113・114）、壺（115・116）、甕（117）、土垂（111）がある。

坏 A（9・100）は掘方でも井戸枠より上層の灰褐色土よりの出土である。口径 13.2㎝前後、径高指数 27.8 である。

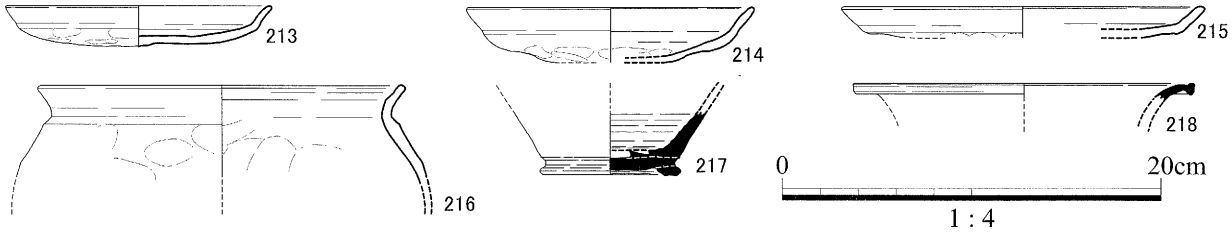


図 22　SE01 内 Pit 出土土器実測図

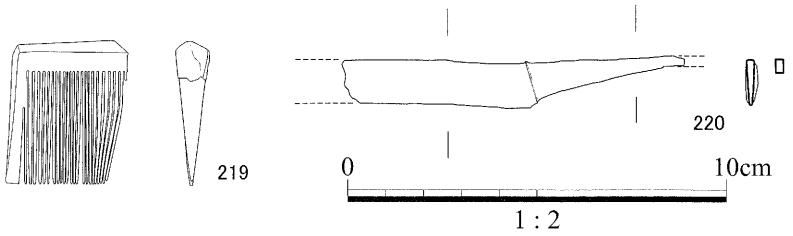


図 23　SE01 中層出土櫛・刀子実測図

坏 B（107）は口径 22.5cmの大型品で外面にミガキ、内面に 2 段の放射状暗文を施すなど丁寧である。類似したものが東大阪市鬼塚遺跡 15 次井戸 2 からも出土しており、坏 B とした。

坏 E（99・101 ～ 103）は掘方下層から出土した。口縁端部内面に面をもたせるもの（99・103）と内側に折り曲げ玉縁状になるもの（101・102）とがある。

皿（104・105）は口径 18.5cm前後、口径指数 8 の浅いものである。その他図化していないが、口径 15cm前後で径高指数 12.5 のものがある。しかし、落ち込み埋土出土の皿のような暗文をもつものは認められない。

椀（106）は口径 18cmで内外面に丁寧なミガキが認められる

甕（183・184 ～ 192）は口径 15cm前後のもの（183・184）と 19cm前後のもの（186 ～ 190・192）と 25cmの大型品（191）とがある。径胴指数は 95.6 前後である。口縁部は平らになるもの（183・190）、外傾するもの（202）、外側に伸びるもの（186 ～ 189）、内傾するもの（191）が認められる。外側に伸びるものには 186 や 189 のように外傾気味になるものも認められる。なお、186 や 187 のように口縁部を 2 回に分けてナデているものがある。また、強いナデのために口縁部と体部との間には強い段が認められもの（184・186・188・191・192）と認められないもの（185・187・189・190）とがある。

鍋（108・109）は口径 20cm前後で、大きく外上方向に開いた口縁部に胴の張らない体部をもつ。台付き甕 B にも類似するが、口縁部が細く、体部の器壁も薄い特徴をもつ。109 は内外面にミガキが認められ、口縁部端部を上方につまむ。

高坏（110）は脚柱部である面取りされており、縦方向にミガキが施されている。中空ではあるが、1cm程度の穴しか認められず、棒状の芯に粘土を巻いて作った可能性がある。

黒色土器皿 B（112）は口径 8.5cmで径高指数 23.5 の低い器高で、内黒である。27 の皿と器形が類似し、施釉陶器皿に似せて作られていると考えられる。

黒色土器甕（185）は口径 15cm前後で口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は丸くおさめている。内面はミガキが認められ、煤が付着している。

須恵器坏（113・114）、壺（115・116）、甕（117）がある。

坏 B は外方に開いた口縁部で口径 13.5cm（113）と 27cm（114）がある。

壺（115・116）は小壺で高台の付く 115 と付かない 116 とがある。

甕（117）は、口径 20cmで外方に開きやや内彎している。口縁端部が玉縁状になっている大型品である。

土垂（111）は幅 2.8cm、長さ 4cmで径 0.8cmの穴が開く筒状のものである。

井戸柱穴

SE01 の覆屋の柱と考えられる柱穴から土師器などが出土している。

土師器皿（213 ～ 215）は、口径 11㎝前後で径高指数 17 前後のもの、13㎝前後で径高指数 15 前後、15㎝前後で径高指数 19 前後、19㎝前後で径高指数 9 前後とがある。

甕（216）は径胴指数は不明であるが、口縁部は短く外上方向に開き、端部は丸いが口縁部内面に凹みが認められる。

須恵器壺（217・218）は高台が付き外方に開く体部、大きく外反し、口縁端部をつまむもので、両者が同一個体とすれば、薬壺の可能性が考えられる。

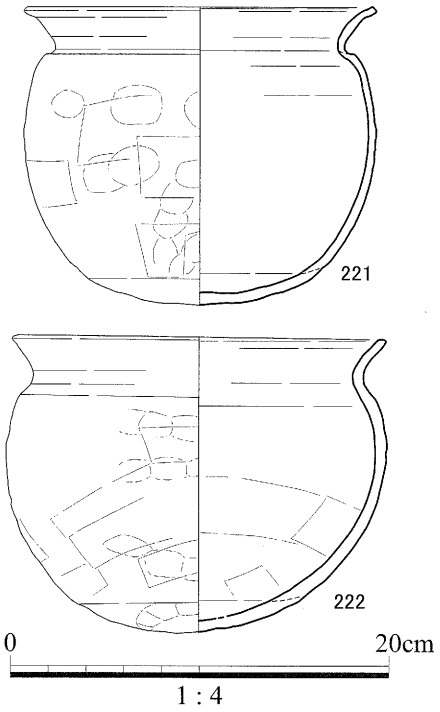


図 24　P131 出土甕実測図

掘立柱建物出土土器

掘立柱建物を構成する P131 から出土した土器について説明する。

甕（221・222）は、口径 19㎝前後で径胴指数 97 前後である。大きく外反する口縁部で端部は外傾する。口縁部と体部の間に段が認められる。形態的に SE01 掘方下層のものに類似する。

まとめ

SE01 の構造について

報告内でも詳しく述べたが、かなり立派な井戸構造であったので、疑問点も含め再度まとめてみる。掘方は後の崩落もあると考えられるが、下が窄まり、中央部が膨らみ、さらに窄まった後、検出面に向かって広がる、断面壷型に掘削されている。

井戸枠は掘方底から約 50㎝上から構築されている。この井戸枠より下の落ち込みは砂礫を多く含み「水溜め」と理解したが、底部で 1.2 ｍと井戸枠より大きく、枡部の底は地山にのっておらず、井戸枠構築の際、問題はなかったのであろうか。井戸埋土の土器より古いものが多量に出土している。また、掘方内の土器も落ち込みのものよりは新しい様相が認められるが、古式の土器も出土している。

井戸枠の最も下は他の横板より広い幅 60㎝、長さ 110㎝、厚さ 8㎝の横板を井籠組みで四方を囲んでおり枡部としている。そこから上は幅 30㎝、長さ 110㎝の横板を井籠組みで 6 段積んでいる。その際、上下板を接合するために中央部に太枘で固定している。この工法を「太枘留め横板組井籠型」と呼んでいる。これには、横木の規格を揃え、組み手の加工を揃え、さらに太枘の加工を揃えるなど、かなり高度な木製品加工技術が必要であった。

さらに最上部の横板を囲んで、縦板を方形に組んでいる。縦板は隅四方に対角線を向くように板を立て、一辺に幅 20㎝前後、厚さ 2 ～ 3㎝長さ 90㎝以上の縦板を 8 枚前後を前後に並べており、内側は細い横板で留めている。この工法を「薄縦板横桟留型」と呼んでいる。その上部に横板相欠き組で転用材を用いて四方を固定している。その上からも横方向の板材が出土しており 2 段に積んでいた可能性もある。また、その上部相欠き組に乗せるように四隅に柱を立て、何らかの上部構造があった可能性がある。

なお、「薄縦板横桟留型」と「太枘留め横板組井籠型」との間には甑、大型鉢など他の層では出土していない土器がみられ、横板相欠き組の直上には川原石とともに坏、甕が出土している。継目の変

わるところに特殊な様相を見せており、これらの土器群は祭祀的な意義があったと考えたい。また、最上層から施釉陶器が出土するのも同様の意義であろう。

このように井戸の最終廃絶までに何度も儀式を窺わせる行為が観察できるのは、井戸を深く掘り、水を得てることから、地の神、水の神への手厚い儀式をもって廃棄したと解釈したい。

出土土器について

これらは坏と甕の器形の変化及び法量によって相対的な流れを示し、都の年代判明遺構で搬出している資料や、記年名資料などから年代を入れ込むものである。

坏は小型化し、粗雑になり、甕は時期が下がるほど体部が球形に近くなり、さらに最大径の位置が下がり、口縁部の形態が異なるなどの大まかな流れを考えている。この方法論に異論を唱えるもの［三宮 2003］もあり、それぞれ出土した層で数値の変化が明確ではないが、時期が下るにつけて異なった様相を示すのも確かなことである。

最下層と掘方には坏Eが含まれるが、他には見られない。3回目と4回目では甕径胴指数が大幅に異なるなどの特徴が見られる。これを先にあげた編年案に照らし合わせると、最上層はⅤ期で10世紀初頭、2回目・3回目はⅣ期新で9世紀後半、4回目・5回目はⅣ期古からⅢ期新で9世紀中頃、掘方がⅢ期古で9世前葉、最下層はⅡ期後半からⅢ期前半で8世紀末から9世紀初頭と考えられる。

このことから、井戸（SE01）は、8世紀末～9世紀初頭に作られ、9世紀中頃～末葉には土器を投棄されている。また、ある程度埋まったときに上層を掘削し、10世紀初頭には完全に廃絶している。この間約100年使われていたと考えられる。

井戸の周辺には掘立柱建物群が認められた。その中の掘立柱建物を構成する柱穴（P131）から出土した甕は径胴指数は96で井戸掘方とほぼ同じ値で同じ時期に成立した可能性が考えられる。主に建物は東西棟で、建物の方向からいくつかの時期がありそうである。井戸の覆屋の南辺を延長すると北辺と一致し、ほぼ磁北に揃えているなど規格的に作られているものもある。建物群と井戸との関連については今後の課題である。（上田）

≪参考文献≫

一瀬和夫 1980「79－38区」『54年度はさみ山遺跡発掘概要』大阪府教育委員会
宇野隆夫 1982「井戸考」『史林』第65巻　第5号
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1990『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所報告書　第10冊
上田睦 1991「KT91－3区」『石川流域遺跡群発掘調査報告Ⅷ』藤井寺市教育委員会
古代土器研究会 1994『古代の土器研究ー律令的土器様式の西・東3　施釉陶器』
山田幸弘 1998「KS96－9区」石川流域遺跡群発掘調査報告ⅩⅢ』藤井寺市教育委員会
上田睦 1999「FJ91－2区」『石川流域遺跡群発掘調査報告ⅩⅣ』藤井寺市教育委員会
（財）東大阪市文化財協会 1999『鬼塚遺跡第13次（遺構編）・第15次発掘調査報告書』
（財）東大阪市文化財協会 2002『鬼塚遺跡第13次（遺構編）・第22次発掘調査報告書』
小森俊寛 1996「総説」『古代の土器4　煮炊具　近畿編』古代の土器研究編
三宮昌弘 2003「平安時代の粗製土師器椀についてー河内地域南半分の土師器椀の動向ー」『郡戸遺跡ー南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書ー』（財）大阪府文化財センター
鐘方正樹 2003『井戸の考古学』ものが語る歴史8　同成社
小森俊寛監修 2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
奈良文化財研究所 2005『平城京兵部省跡』
（財）大阪府文化財センター 2005『はざみ山遺跡 藤井寺団地建替事業に伴う埋蔵文化財発掘報告書』(2)
（財）大阪府文化財センター 2006『はざみ山遺跡2 藤井寺団地建替事業に伴う埋蔵文化財発掘報告書』
新開義夫 2010「KT99－11区」『石川流域遺跡群発掘調査報告XXV』藤井寺市教育委員会

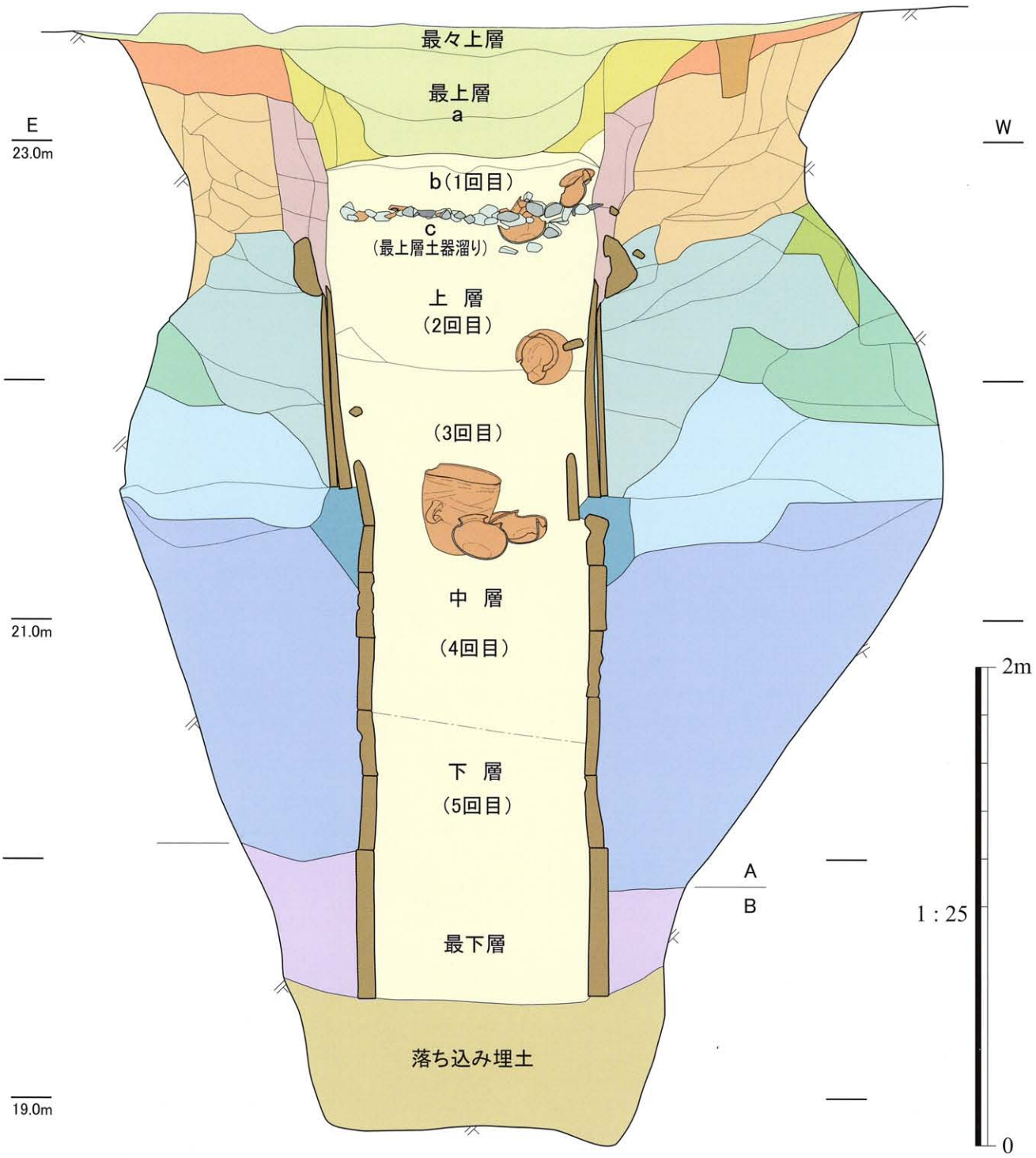
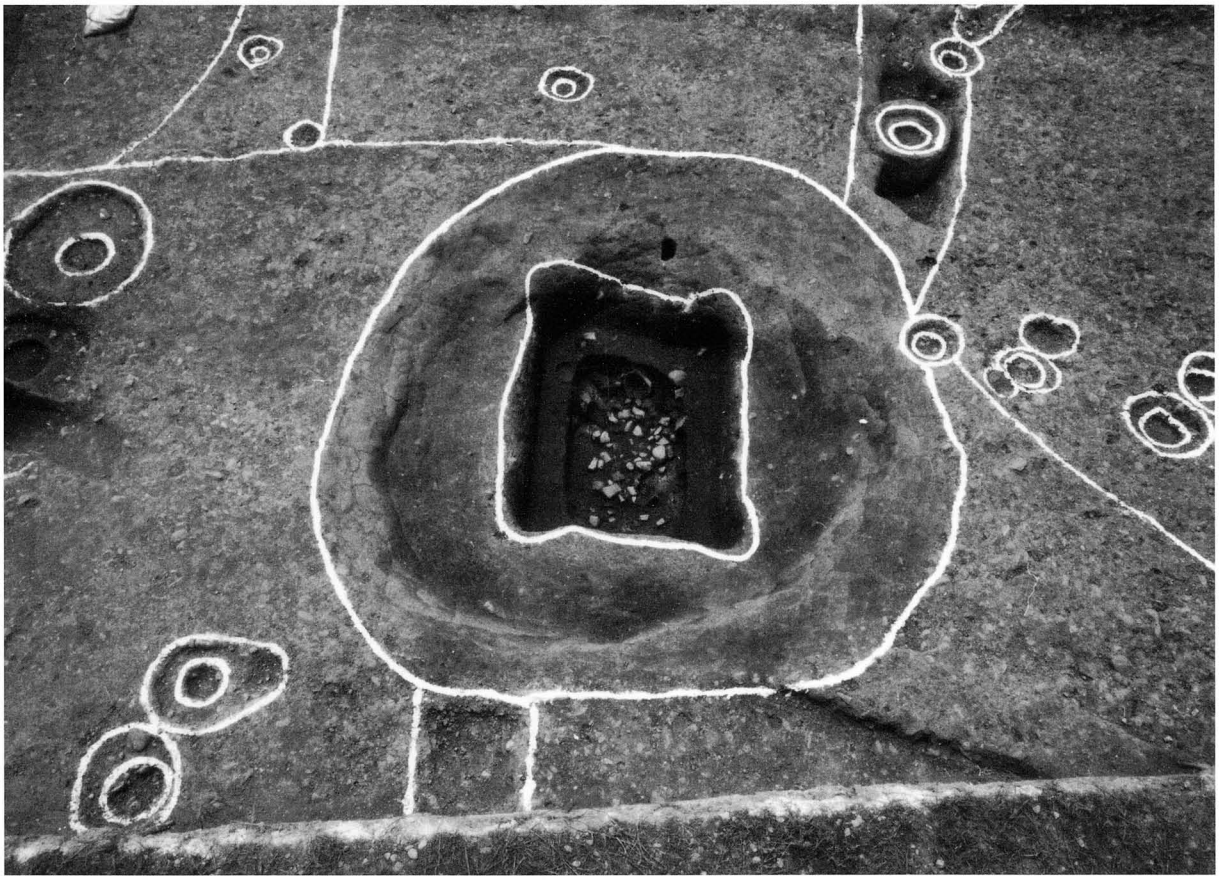

最々上層
最上層
a
E
23.0m
W
b（1回目）
c
（最上層土器溜り）
上 層
（2回目）
（3回目）
中 層
（4回目）
21.0m
下 層
（5回目）
A
B
最下層
落ち込み埋土
19.0m
2m
1 : 25
0
暗灰褐色土
暗褐色粘土
黄灰褐色土
濁灰褐色土
灰褐色土
灰褐黄色土
淡青灰色シルト
淡青灰色粘土
灰褐色砂質土
暗青灰色粘質土
暗黄灰色粘土
青灰色砂
暗青灰色シルト
砂混じり暗青灰色粘土
暗灰色粘土
A 褐色砂礫（地山）
B 青灰色シルト（地山）

図 25　SE01 断面図

図版一

A・B区全景

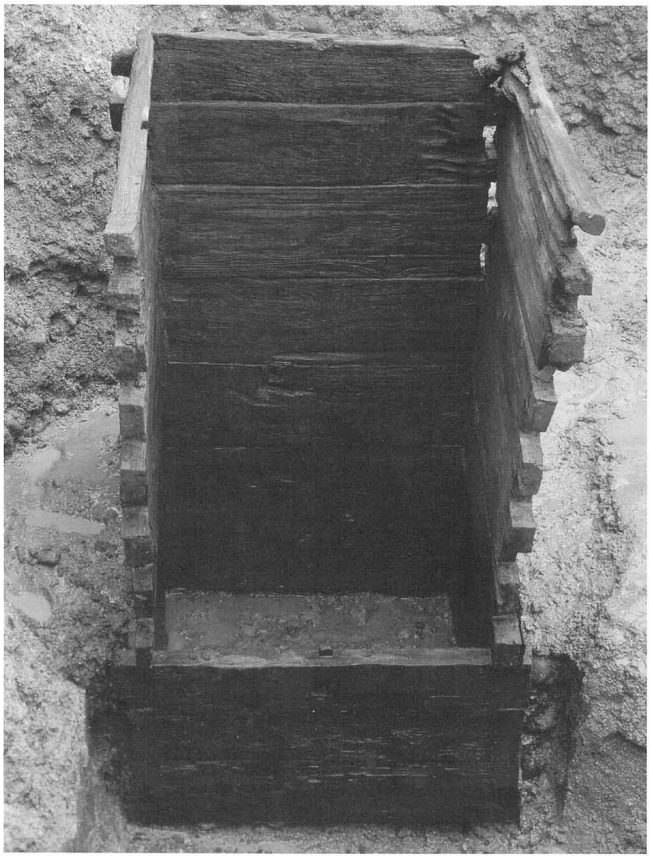


SE01 最上層遺物出土状況（東より）

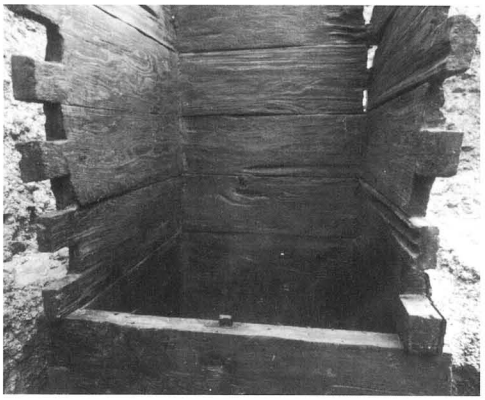
中層遺物出土状況（南より）

図版三

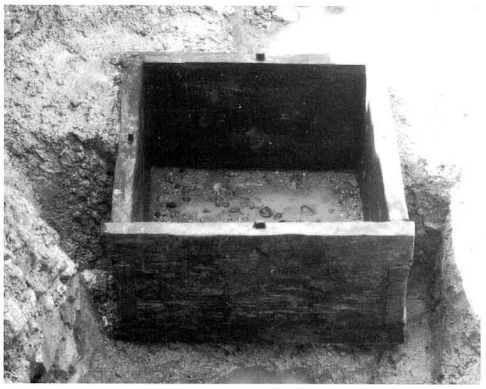
SE01 井戸枠全景（北より）



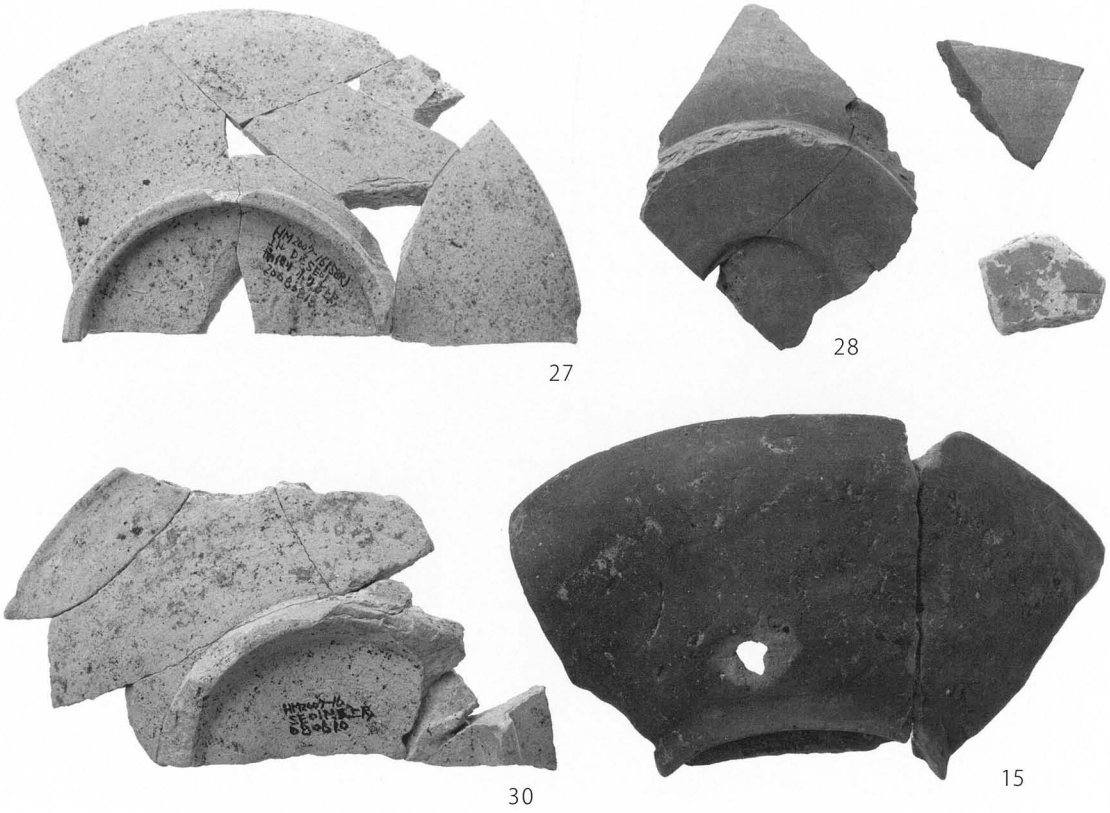
井籠型内部



井籠型・太枘



枡部



SE01 最上層出土土器

最上層出土土器

図版五

中層出土土器

中層出土土器

下層出土土器

下層・落ち込み埋土出土土器

図版七

106

112

11

192

186

最上層・掘方出土土器

37

26

出土黒色土器

210

194

196

195

209

54

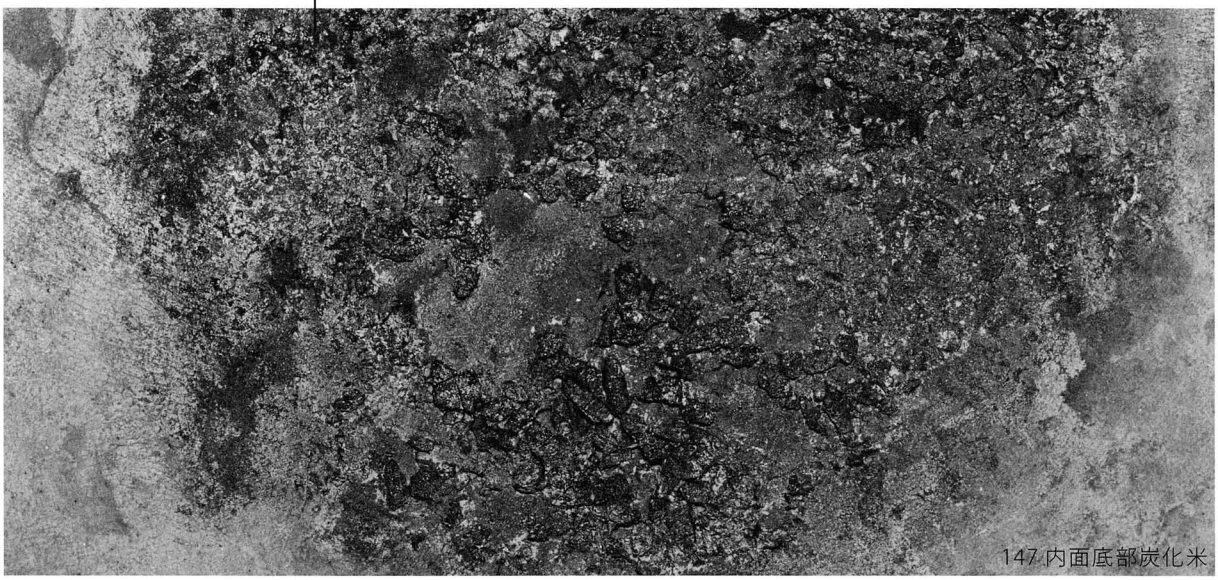
212

出土土器

図版九

147

158

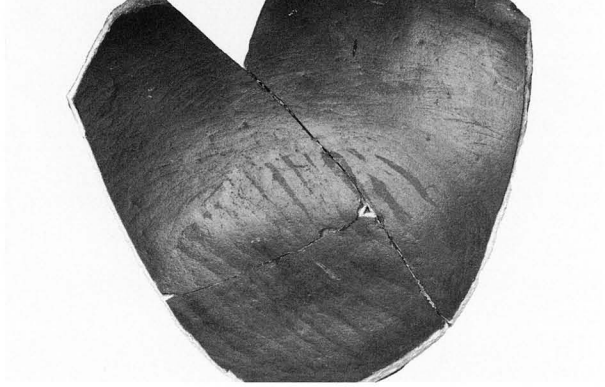


147 内面底部炭化米

65

77

70



出土土器

85

90

出土土器

220

刀子

219

櫛

例　言

1　本書は、宅地造成に伴い2008年度に実施した、はざみ山遺跡（HM07 － 16区）発掘調査の概要報告書である。調査地は、藤井寺市さくら町131 － 1に所在する。

2　調査は、申請者の依頼を受け、藤井寺市教育委員会事務局教育部文化財保護課が実施した。期間は、現地調査（外業）2008年4月4日～10月16日、整理作業（内業）2009年11月16日～2010年1月15日である。

3　本書の作成は、上田睦、今荘ひとみ、尾崎理枝、寺崎理恵が行った。遺構写真の撮影は上田睦が行い、遺物写真は有限会社阿南写真工房にお願いした。

4　図面の方位は、特に断りのない限り座標北を使用した。標高はT.P.を用いた。トレンチ位置図は、上を座標北とした。

報告書抄録

ふりがな	はざみやまいせき
書　　名	はざみ山遺跡
副 書 名	HM2007 － 16区
シリーズ名	藤井寺市発掘調査概報
シリーズ番号	第4号
編集機関	藤井寺市教育委員会
所 在 地	〒583-8583　大阪府藤井寺市岡1丁目1番1号　TEL 072-939-1111 (代)
発行年月日	西暦2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はざみ山遺跡	おおさかふ 大阪府 ふじいでらし 藤井寺市 さくら町	27226	51	34° 34′ 05″	135° 36′ 02″	現地調査 (外業) 2008年4月4日 ～10月16日 (内業) 2009年11月 16日～2010年 1月15日	1505	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
はざみ山遺跡	集落跡	古代	井戸、溝、土壙、 掘立柱建物跡	土師器、須恵器、瓦	

藤井寺市発掘調査概報　第4号

はざみ山遺跡（HM2007 － 16区）

発行日　2011年3月31日
編集・発行　藤井寺市教育委員会事務局
藤井寺市岡1丁目1番1号
TEL（072）939-1111 (代)
印　　刷　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号